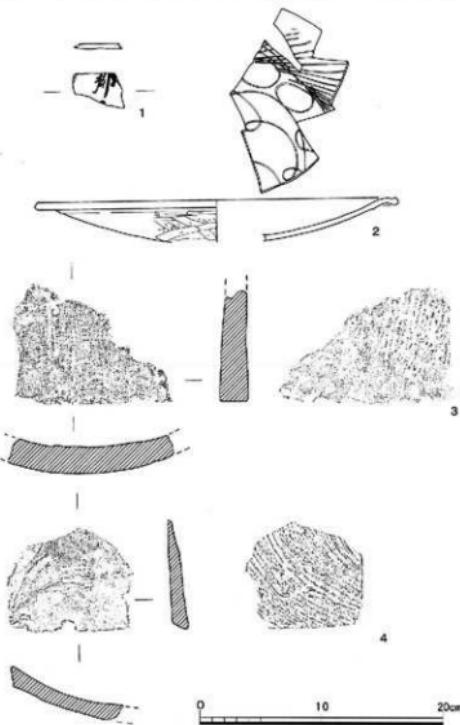


シルト・砂質粘土質シルトを主体とする上層と砂質泥・砂が不均質に混じる下層に分けられる。埋土からの出土遺物は、土師器・須恵器・平瓦の破片で、奈良時代前期から平安時代前期に比定できるものである。土器類は下層から、平瓦は上層から出土している。4点(1～4)を図化した。1は土師器の小片で、杯・皿などの底部と見られる。器面調整は、内面にナデ、外面にヘラ削りを施す。外面に「郡□(□部分不明)」の墨書がある。「郡」の表記は、大宝律令発布(702年)以降に多く見られることから、それ以降のものと考えられる。2は土師器高杯の杯部。平らな杯部を持ち、器面調整は、外面にヘラ削りを施し、口縁部は横方向のナデを施す。内面には外側から順に放射状・螺旋状の暗文が巡る。3は平瓦。凹面に布目痕・桶鉢痕、凸面に綱目タタキが残る。広端面は削られている。焼成は不良で、色調はぶい橙色を呈する。4は平瓦。凹面に布目痕が残り、凸面はやや単位幅の広いハケ状工具により平滑にされており、斜め方向に走る条痕が残る。端面・側縁は削られている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。造構の帰属時期は、出土遺物から奈良時代前期から平安時代前期に比定できる。



第7図 流路201出土遺物実測図

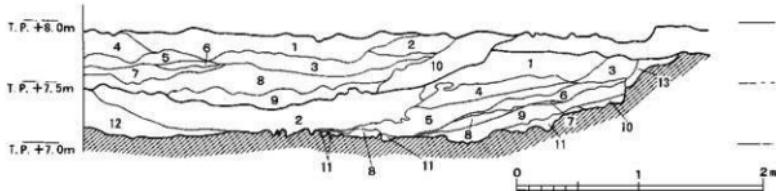
第3面(第4図、図版二)

9層・10層を除去した面(T.P.+7.7～7.8m)で、近世に比定できる土坑2基(SK301・SK302)、古墳時代中期に比定できる溝1条(SD301)、古墳時代後期中葉・飛鳥時代後期に比定できる流路1条(流路301)を検出した。

流路(流路)

流路301(第8図、図版二・三)

調査区南部のⅧ-16-7・8F・G地区で検出した。検出部分で、長さ4.70m・幅0.40m・深さ0.7mを測る。埋土については、第8図の通りであるが、概ね、砂質泥・砂が不均質に混じる



流路201

- 1 5Y4/2灰オーピーブ色細粒の中層以絹の複数層じる砂質シルト+2.5Y4/2堆灰黄色細粒～極細粒砂質粘土質シルト・2.5Y5/2堆灰黄色中粗粒～極細粒砂(ブロック状) 膨化マンガン(斑点状)
- 2 5Y4/2灰オーピーブ色細粒～極細粒砂質粘土質シルト+5Y5/2灰オーピーブ色細粒砂～極細粒砂・5Y5/2灰オーピーブ色細粒砂～中粗粒(層状・ブロック状)
- 3 2.5Y5/2黄褐色細粒～中粗粒+5Y4/5/2反オーピーブ色細粒～極細粒砂質粘土質シルト(薄層状)
- 4 2.5Y5/2堆灰黄色細粒～極細粒砂質粘土質シルト 膨化マンガン(斑点状)・膨化族(斑点)
- 5 5Y4/5/2灰オーピーブ色細粒砂～中粗粒～極細粒砂+2.5Y4/3灰オーピーブ色細粒～極細粒砂質粘土質シルト
- 6 5Y5/2灰オーピーブ色細粒砂～中粗粒～極細粒砂+2.5Y4/3灰オーピーブ色細粒～極細粒砂質粘土質シルト(層状・ブロック状)
- 7 5Y4/5/1灰色細粒の中層以絹の複数層じる細粒～極細粒砂質粘土質シルト(5より粘質)
- 8 2.50Y5/1オーピーブ灰色(2.5Y4/2堆灰黄色)細粒砂～極細粒砂+10Y4/1灰色(2.5Y4/3灰オーピーブ灰色)シルト質細粒～極細粒砂・10Y5/1灰色(10Y4/4褐色)細粒以絹の砂礫・7.5Y4/1灰色細粒～極細粒砂質粘土質シルト(ブロック状・層状)
- 木本の植物遺体含む
- 9 7.5Y4/1灰色細粒～極細粒砂質粘土質シルト・10Y5/1灰色細粒砂～極細粒砂・10Y4/1灰色細粒～極細粒砂質じる粘土質シルト(ブロック状)+中粗粒の木本の植物遺体含む
- 10 2.50Y4/1堆灰オーピーブ灰色(2.5Y4/1堆灰黄色)の中層以絹の細粒～極細粒砂質粘土質シルト(アより粘質)

流路301-I

- 1 2.5Y4/5/2堆灰黄色(7.5Y4/1堆灰黄色)シルト質細粒～極細粒砂 2.5Y4/1灰色(2.5Y4/1堆灰オーピーブ灰色)粘土質シルトの葉層・葉層を下部に敷居挟む
- 2 50Y3/5/1堆灰オーピーブ灰色細粒～極細粒砂+10Y3/1オーピーブ黑色シルト質細粒～極細粒砂・10Y4/1灰色細粒砂～堆灰細粒(斑状・不明瞭な層状) 50Y4/5/1堆灰オーピーブ灰色細粒の中層以絹の複数層じる砂質粘土質シルト(ブロック状)・5Y5/2灰オーピーブ色細粒の中層以絹の砂礫(層状)
- 3 2.5Y5/2堆灰黄色細粒～極細粒砂質粘土質シルト+粗粒の中層以絹の層+下部では2.5Y4/5/2堆灰黄色細粒砂～極細粒砂(不明瞭な層状)
- 4 7.5Y4/1灰色細粒砂質じるシルト質粘土・10Y3/1黑色褐色細粒砂質じる粘土質シルトの薄層 10Y4/1灰色粘土質シルトと極細粒砂の葉層の互層を換む 部分的に7.5Y5/1灰色細粒砂～極細粒砂のレンズ状の葉層を挟む
- 5 10Y3/1オーピーブ黑色褐色細粒砂質じる粘土質シルト・7.5Y3/1オーピーブ黑色シルト質粘土の薄層+5Y4/1堆灰オーピーブ灰色シルト質粘土・極細粒砂質じる粘土質シルト 木本の植物遺体含む
- 6 10Y4/1灰色細粒砂～極細粒砂質じる粘土質シルト 下部では10Y4/5/1灰色細粒砂～極細粒砂が主体
- 7 7.5Y3/1オーピーブ黑色粘土質シルト
- 8 10Y5/1灰色細粒の中層以絹の砂礫
- 9 10Y5/1灰色細粒～堆細粒砂 下部では10Y4/1灰色細粒～極細粒砂質粘土質シルト(不明瞭な層状・ブロック状)が主体(その中に10Y3/1オーピーブ黑色シルト質粘土と互換し10Y5/1灰色細粒砂以絹の砂で充填された箇所)
- 10 10Y4/1灰色細粒砂質じるシルト質粘土・7.5Y4/1灰色細粒の中層以絹の砂礫・2.5Y4/1堆灰オーピーブ灰色シルト質細粒～極細粒砂の薄層
- 11 2.50Y3/5/1堆灰オーピーブ灰色細粒～極細粒砂質粘土質シルト+10Y4/5/1灰色粗粒砂以絹の砂(ブロック状)+中粗粒の中層以絹の層

流路301-I

- 12 10Y5/1灰色中粒の中層以絹の砂礫 最下部に2.50Y3/5/1堆灰オーピーブ灰色シルト質細粒～極細粒砂の薄層
- 13 2.5Y4/2堆灰黄色細粒の中層以絹の砂質多量じる細粒～堆細粒砂質粘土質シルト(3より粘質)

第8図 流路201・流路301断面図(西壁部分、S=1/40)

上層と砂質泥を主体とする下層、砂礫を主体とする最下層の3層に大きく分けられる。

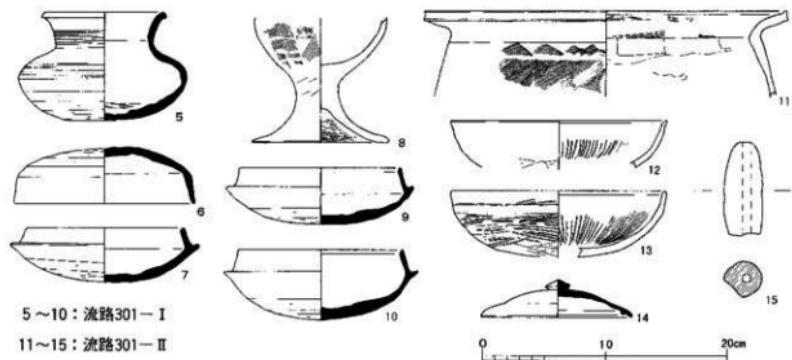
流路301については、埋土断面および出土遺物から、大きく古墳時代後期中葉に比定できる流路と、これを切る飛鳥時代に比定できる流路に分けられることから、前者を流路301-I、後者を流路301-IIと呼称する。現地調査では、同一の流路として検出・掘削した。

出土遺物のうち6点(5~10)を図化した。5~8は流路301-Iの肩にセットで置かれた状態で出土したもので、9~10は最下の砂礫層および河床から出土したものである。5は須恵器短頸壺。外反する口縁部を持ち、端部は下方に肥厚し、外傾する僅かな凸面を持つ。体部は寸胴な扁球形を呈する。器面調整は、内面および口縁部に回転ナデを施し、頭部から体部上半にかけてカキ目が見られる。体部下半から底部にかけては回転ヘラ削りを施す。6は須恵器杯蓋。平らに近

い狭い天井部から丸みを帯びて斜め下方に伸び稜に至る。口縁部は僅かに外傾して下り、端部は平坦気味で内傾する。器面調整は、天井部外面に回転ヘラ削り、それ以外の部分に回転ナデを施す。天井部内面に同心円當て具痕とそれをナデ消した跡が残る。7は須恵器杯身。平らに近い狭い底部から丸みを帯びて斜め上方に伸び受部に至る。受部は水平に伸び、端部は丸い。立ち上がりは内傾して伸び、端部は丸い。器面調整は、底体部には回転ヘラ削り、それ以外の部分には回転ナデを施す。底部内面に同心円當て具痕とそれをナデ消した跡が残る。8は土師器高杯と見られるが、杯部口縁を欠損するため定かではなく、台付壺の可能性もある。半球形の杯部を持つ。中実の脚部は、外下方に外反して伸び、裾部は大きく開いて、端部は丸い。器面調整は、杯部外面に縱方向、裾部外面に横方向のハケナデを施し、裾部外面に横方向のナデを施す。9・10は須恵器杯身。口縁端部が平坦気味で内傾する以外は、器形・器面調整とともに7と同じ。須恵器杯身・杯蓋は田辺編年のT K 10型式(古墳時代後期中葉)に比定できる。

流路301-I 墓土の出土遺物は、土師器・須恵器・土製品・骨・種子で、土師器・須恵器は概ね飛鳥時代後期(飛鳥III)に比定できる。5点(11~15)を図化した。11は土師器長胴壺。肩部から「く」の字に屈曲し外反する口縁部を持ち、端部は外傾する僅かな凹面を持ち、上方につまみ上げられている。胴部は張らない。器面調整は、体部外面に斜め方向のハケナデ、内面に横方向の板ナデを施す。口縁部は横ナデを施す。12は土師器杯。内面に放射状暗文が見られ、器面調整は、底部外面にヘラ削り、口縁部は横ナデを施す。13は土師器杯。内面に放射状暗文が見られ、器面調整は、外面にヘラ削りの後、体部に横方向のヘラ磨き、口縁部に横ナデを施す。14は須恵器杯蓋。やや扁平な宝珠形のつまみと短いかえりを持つ。器面調整は、天井部内面は粗くナデ付けられており、その他の部分は回転ナデを施す。15は土師質の管状土錘。表面は磨滅しており、約3/4が残存する。

流路301の底で、土坑1基(流路301内土坑)を検出した。北西-南東方向に長軸を持つ平面不整円形を呈し、長径1.0m・短径0.70m・深さ0.16mを測る。埋土は、流路301-I下層と類似する砂質泥のブロックを主体とする。出土遺物は、土師器・須恵器・骨が出土している。その中、土



第9図 流路301出土遺物実測図

師器高杯の脚部と杯部の破片は、飛鳥時代後期(飛鳥Ⅲ)に比定できる。遺構の帰属時期は、出土遺物から流路301-Iと同じく飛鳥時代後期で、流路301内土坑は、流路301-I機能時ないし埋没過程で掘削され、埋め戻されたと考えられる。

土坑 (S K)

S K 301

調査区北部のⅧ-16-6 G 地区で検出した。平面橢円形で、長辺0.95m・短辺0.67m・深さ0.2mを測る。埋土は、近世の水田耕土である4層に、9層以下遺構のベースとなる層のブロックが混じる。遺物は出土していない。遺構の帰属時期は、埋土から近世に比定できる。

S K 302

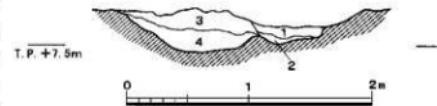
調査区南部のⅧ-16-7 G 地区で検出した。南東側は調査区地外に至り、北西側は S E 102に切られるため、平面形状は不明であるが、橢円形を呈すると思われる。検出部分での長径1.0m・短径0.8m・深さ0.8mを測る。埋土は、4層以下遺構のベースとなる層のブロックを主体とする。出土遺物は、土師器・肥前系磁器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から近世に比定できる。

S K 301・S K 302については、第3面で検出したが、埋土・出土遺物から、本来は第1面で検出すべき遺構であることがわかった。

溝 (S D)

S D 301 (第10図)

調査区北部のⅧ-16-6 F・G、7 G 地区で検出した。南東-北西方向に蛇行して伸びるもので、検出長5.3m・最大幅1.9m・深さ0.35mを測る。埋土については、第10図の通りであるが、概ね、細粒の砂を主体とする葉層の互層からなる。埋土断面から、ほぼ平行に切り合う2条の溝であることがわかる。南側の溝を S D 301-I、S D 301-Iを切る北側の溝を S D 301-IIと呼称する。現地調査では、同一の溝として検出・掘削した。出土遺物は、S D 301-IIの埋土下層から須恵器の破片が出土地している。遺構の帰属時期は、出土遺物と層位から古墳時代中期に比定できる。



- S D 301-II
1. 2.5Y4/1黄灰色細粒～極細粒砂混じる粘土質シルト+10Y4.5/1灰色細粒砂～粗粒砂(斑状) 鎾化マangan(斑点状) 密
2. 10Y4.5/1灰色細粒砂～極細粒砂と2.5Y4/1黄灰色シルト質極細粒砂の葉層の互層
S D 301-I
3. 2.5Y4.5/1黄灰色細粒～極細粒砂混じる粘土質シルト+7.5Y4.5/1灰色細粒砂(葉層状)
4. 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂～粗粒砂と2.5Y4/1黄灰色シルト質極細粒砂の葉層の互層(砂の葉層主体) 鎾化鉄(斑状)

第10図 S D 301断面図(西壁部分、S=1/40)

第4面 (第4図、図版四)

13層を除去した面(T.P.+7.6m前後)で、古墳時代前期(布留式期)に比定できる溝5条(S D 401～S D 405)を検出した。

溝 (S D)

S D 401 (第11図)

調査区中央部のⅤ-16-7 F・G地区で検出した。南東-北西方向に伸びるもので、検出長4.7m・最大幅1.15m・深さ0.4mを測る。埋土・断面形状については、第11図の通りであるが、溝の壁は、オーバーハングしており、部分的に断面袋状を呈する。遺物は出土していない。遺構の帰属時期は、層位から古墳時代前期(布留式期)以降に比定できる。

S D 402 (第11図)

調査区中央部のⅤ-16-7 F・G地区で検出した。南東-北西方向に伸びるもので、検出部分での長さ4.7m・幅3.05m・深さ0.2mを測る。埋土については、第11図の通りである。出土遺物は、土師器の破片が出土している。

S D 403 (第11図)

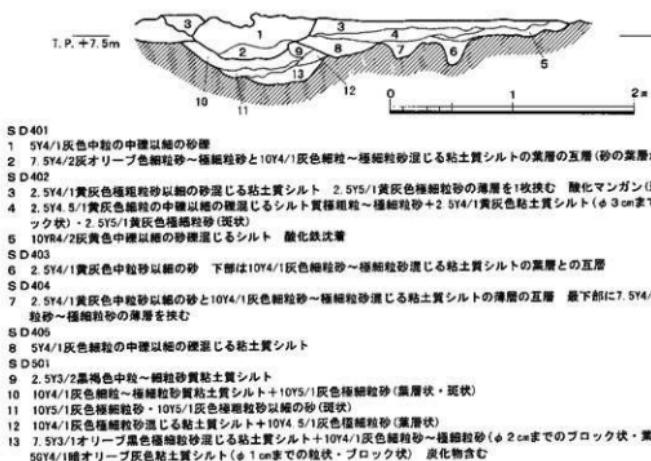
調査区中央部のⅤ-16-7 F・G地区で検出した。S D 402の底面を南東-北西方向に伸びるもので、検出部分での長さ4.58m・幅0.3m・深さ0.2mを測る。埋土については、第11図の通りである。出土遺物は、布留式期に比定できる土師器の破片が出土している。

S D 404 (第11図)

調査区中央部のⅤ-16-7 F地区で検出した。S D 402の底面を南東-北西方向に伸びるもので、検出部分での長さ1.77m・幅0.18m・深さ0.15mを測る。埋土については、第11図の通りである。出土遺物は、土師器の破片が出土している。

S D 405 (第11図)

調査区中央部のⅤ-16-7 F地区で検出した。S D 402の底面を南東-北西方向に伸びるもの



第11図 S D 401～S D 405・S D 501断面図 (S=1/40)

で、検出部分での長さ1.55m・幅0.36m・深さ0.18mを測る。埋土については、第11図の通りである。出土遺物は、布留式期に比定できる土師器壺の破片が出土している。S D405は、S D404に切られている。

S D402～S D405は、出土遺物・層位から、帰属時期を古墳時代前期に比定できる。

第5面（第5図）

18層上部の極細粒砂混じる粘土質シルト～シルト質粘土を除去した面(T.P. +7.6m前後)で、古墳時代前期(布留式期)に比定できる土坑1基(S K501)、溝1条(S D501)を検出した。

土坑 (S K)

S K501

調査区中央部のⅧ-16-7 F・G地区で検出した。南東～北西方向に伸びるもので、検出部分での長さ0.78m・幅0.65m・深さ0.40mを測る。埋土については、第11図の通りである。出土遺物は、布留式期に比定できる土師器壺の破片が出土している。

溝 (S D)

S D501（第11図）

調査区中央部のⅧ-16-7 F・G地区で検出した。平面円形を呈し、径4.8m・深さ0.05mを測る。埋土は、歪な逆台形を呈する断面形状に沿って、粘土質土を主体とする2層が堆積する。遺物は出土していない。S D501は、S K501の周りを掘り下げる段階で検出したものであるが、S K501に切られることを確認している。

S K501・S D501は、出土遺物・層位から、帰属時期を古墳時代前期に比定できる。

第6面（第5図、図版五）

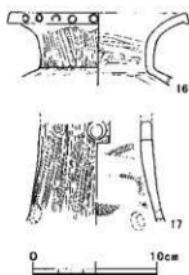
古墳時代初頭に比定できるシルト質粘土を主体とする水成層(20～22層)を除去した面(T.P. +6.7～7.1m)で、弥生時代後期後半に比定できる落ち込み(S O601)を検出した。

落ち込み (S O)

S O601（第12図、図版五・九）

調査地南西部を除く全調査地で検出した。東側・北側は調査地外に至るため、全体の形状は不明である。S O601の埋土については、第2章第2節(377頁)に記載している通りであるが、概ね、砂ないし砂質泥層である。S O601の底からは、偶蹄類・鳥類などの動物の足跡を多く検出した。

S O601内には周りより高い部分が見られるが、この高まりは、26層上面に構築された盛土があり、その上位に堆積した粘土層が残ったものと考えられる。本来、この粘土層は全体的にあったものと考えられ、この粘土層を切る形でS O601が形成されたと考えられる。また、この



第12図 S O601高まり内
出土遺物実測図

高まりの南側には溝状に深くなっている部分があり、上位から、①草本の植物遺体を含み有機質に富む粘土質シルトとシルト質極細粒砂の葉層の互層、②粗粒砂以細の砂と粘土質シルトの葉層の互層が堆積する。砂層中から弥生時代後期に比定できる土器の破片が出土している。S O 601内の高まりの芯をなす盛土の上面から出土した土器(17)、および上位の粘土層から出土した土器(16)を図化した。弥生時代後期後半に比定できる。16は弥生土器広口壺、内上方に伸びる体部から鋸く屈曲し、上外方に外反して伸び口縁部に至る。口縁端部は外傾する平坦面を持ち、平坦面には赤彩を施す竹管文が見られる。器面調整は、頸部内面に横方向、外面に縱方向のヘラ磨きを施す。17は弥生土器器台の胴部。上部は擬口縁を境に欠損し、下部は破損している。残存部分で2段の四方透孔が穿たれている。器面調整は、外面に縱方向のヘラ磨きを施し、内面は横方向のハケナデの後、ナデを施す。

第7面（第5図、図版六）

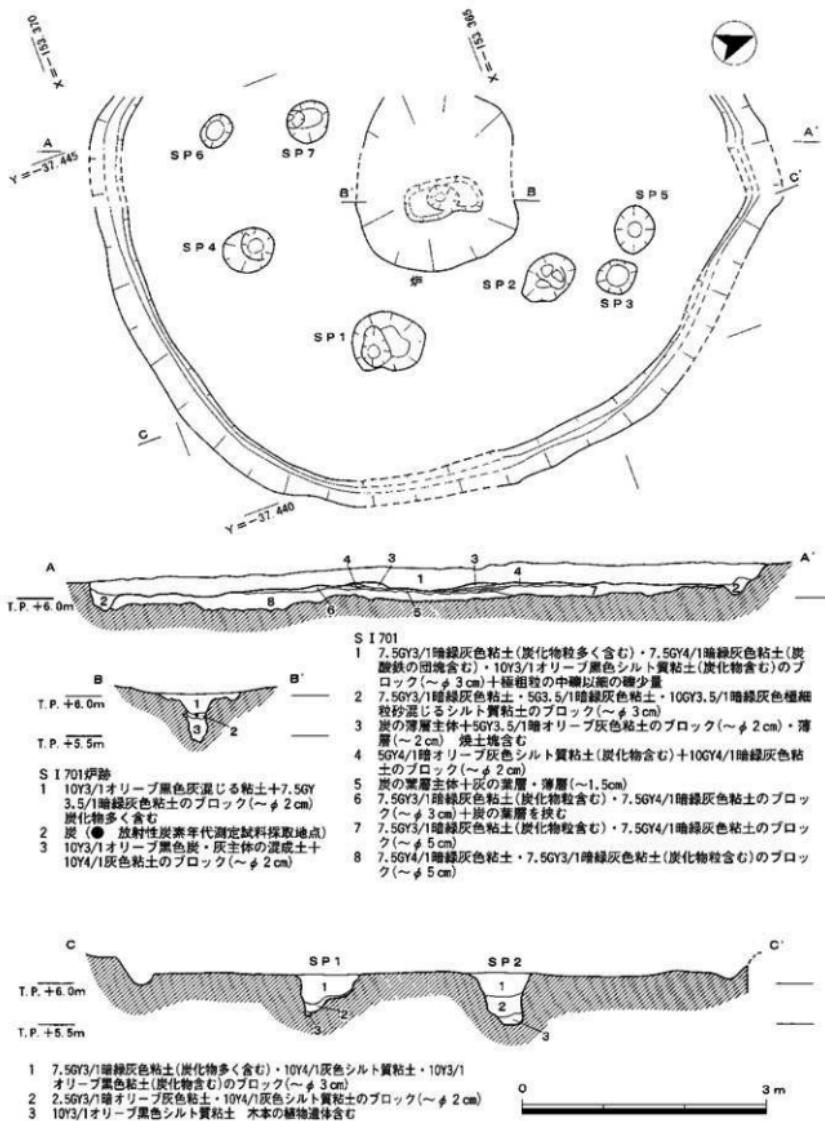
弥生時代後期中葉に比定できるシルト質粘土を主体とする水成層(23~26層)を除去した面(T.P.+6.2~6.4m)で、弥生時代後期前半に比定できる堅穴住居1棟(S I 701)を検出した。

堅穴住居（S I）

S I 701（第13・14図、図版七・九・一〇）

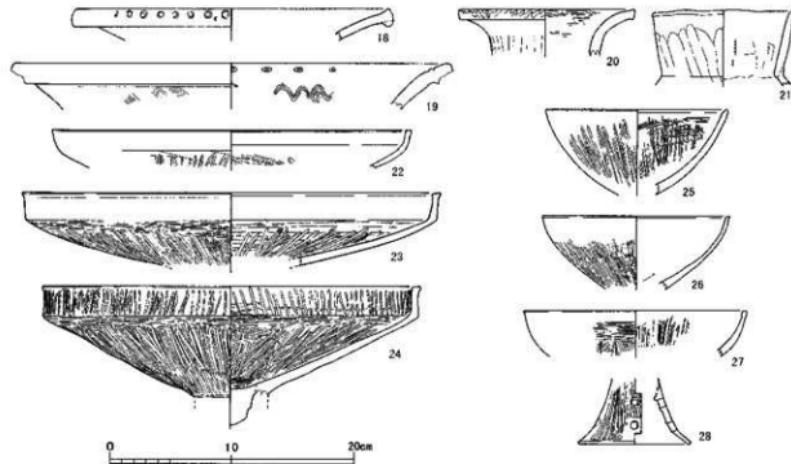
調査地中央部より南側のⅧ-16-7 F・G、8 F地区で検出した。西側部分は調査地外に至るため、全体を検出できなかったが、平面形状は、南北に僅かに長い円形を呈するものと見られる。長軸8.40m・短軸5.1m・深さは0.15~0.25mを測る。壁面に沿って、壁溝が巡る。壁溝の幅は0.15m前後で、深さは0.1m前後を測る。埋土の違いから床面で検出したS P 1・S P 2と、調查地西壁の埋土部分を除去して検出したS P 7が主柱穴で、主柱穴の位置から4本柱であったと推測される。S P 3~S P 6は、床土を除去した段階で検出したものである。

床面の中央部で炉跡を検出した。炉は、南東~北西方向に長軸を持つ不整な楕円形を呈し、長軸が約2.2m、短軸が約1.9mを測り、床平坦面から深さ0.1mまでの緩やかな落込みの中央部に、火の本体となる土坑が掘り込まれている。この土坑は南西~北東方向に長軸を持つ不整な楕円形を呈すると推測され、長径は0.9m、短径は西側部分が側溝に切られるため不明である。さらに、この土坑の中央部に火の芯となる穴が掘り込まれている。西側部分が側溝に切られるため形状は不明であるが、径0.4mほどの円形を呈すると推測され、深さは土坑の上面から約0.7mを測る。S I 701の本体・柱穴・火跡の詳細な形状・埋土については、第13図の通りであるが、S I 701は、理土の堆積状況から、廃棄時に柱が引き抜かれ一度に埋め戻されたことが確認できる。出土遺物は、主に建物廃棄時の床上埋土から整理用コンテナ1箱ほどの弥生時代後期前半(寺沢・森井編年、河内V-1様式)に比定できる弥生土器の破片を主とする遺物の他、床上埋土・壁溝埋土から炭化米が出土している。11点(床上埋土:18~20・22・23・27・28、床直上:24、S P 1:26、S P 3:21・25)を図化した。18は広口壺。口縁部のみ残存。粘土紐を貼り付けて垂下させた口縁端部を持つ。端面に竹管文が見られる。19は大形器台の口縁部。粘土紐を貼り付けて垂下させた口縁端部の痕跡が見られる。口縁端部に近い内面に竹管文、その内側に波状文が見られる。口縁端部内面と竹管文に赤彩を施す。20は広口壺。口頭部のみ残存。頭部は上外方に外反して伸び口縁部に至



第13図 S I 701平面面図(S=1/60)

る。口縁端部は僅かに内傾する平坦面を持ち、平坦面には波状文を施す。器面調整は、頸部内面に横方向、外面に縦方向のヘラ磨きを施す。21は広口直口壺。頸部は上外方に直線的に伸び口縁部に至る。口縁端部は僅かに外傾する平坦部を持つ。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部内外面にナデを施す。頸部内面に板状工具によるナデ痕が部分的に見られる。22は高杯。口縁部～杯部の体部上半の約4/5が残存。杯体部から丸みを帯びて上外方に伸び口縁部をなす。口縁端部は上に平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内面に横方向のヘラ磨き、体部外面にハケナデ後、縦方向のヘラ磨きを施す。色調は黒褐色を呈する。23は高杯の杯部。外上方に伸びる杯体部から明瞭な稜をなして上方に伸び口縁部をなす。口縁端部は外接して上に幅広の平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内面に縦方向のヘラ磨き、体部外面に縦方向のヘラ磨き後、上部に横方向のヘラ磨きを施す。24は高杯の杯部。外上方に伸びる杯体部から明瞭な稜をなして上方に伸び口縁部をなす。口縁端部は外接して上に幅広の平坦面を持つ。円孔充填により杯底部を作る。器面調整は、口縁部に横ナデ後、内面に縦方向の線状のヘラ磨き、外面に波状のヘラ磨きを施す。体部内面に縦方向のヘラ磨き、体部外面に縦方向のヘラ磨き後、上部に横方向のヘラ磨きを施す。25は高杯の杯部。楕形の杯部で、口縁端部は内傾する丸みを帯びた平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、内面に縦方向のヘラ磨き後、上部に横方向のヘラ磨き、外面に縦方向のヘラ磨きを施す。26は高杯の杯部。楕形の杯部で、口縁端部は僅かに内傾する平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、杯体部外面に縦方向のヘラ磨き、内面にヘラ磨きを施す。27は高杯の杯部。楕形の杯部で、口縁端部は上に平坦面を持つ。平坦面に赤彩を施す。器面調整は、口縁部に横ナデ、内面に縦方向のヘラ磨き、外面にハケナデ後、横方向のヘラ磨きを施す。28は高杯の脚部。外下方に外反して伸び、裾部は僅かに開く。裾端部は内傾する丸みを帯びた平坦面を持つ。残存部分で、3段の透孔が穿たれている。床上埋土、主柱穴、床直上、床下小穴ともに、遺物が示す時期差は殆どない。



第14図 S I 701出土遺物実測図

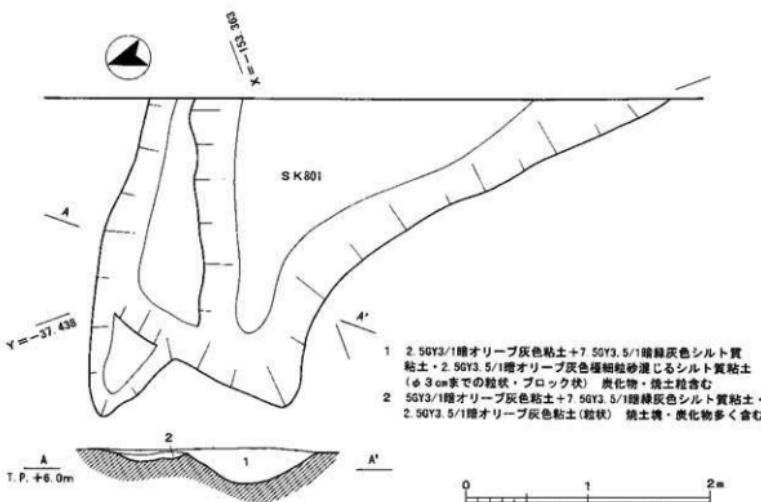
第8面（第5図、図版七）

34層上面(T.P.+6.0m前後)で、弥生時代前期後半に比定できる土坑2基(S.K.802・S.K.803)、弥生時代後期前半に比定できる土坑1基(S.K.801)、溝1条(S.D.801)を検出した。壁断面では、弥生時代前期後半に比定できる遺構は、33層上面に切り込み面を持つが、ベース層と埋上との区別が不明瞭なため、33層までを除去した34層上面で検出した。

土坑(S.K.)

S.K.801(第15・16図、図版七・一〇)

調査地中央部の北寄りのⅧ-16-7G地区で検出した。検出部分でも不定形を呈し、東側は調査地外に至るため、平面形状は不明である。南北長4.25m・東西長2.60m・深さ約0.3mを測る。断面形状・埋土については、第15図の通りである。埋土から、寺沢・森井編年の河内V-1様式(弥生時代後期前半)に比定できる弥生土器の破片を主とする遺物の他、炭化米が出土している。8点(29~36)を図化した。29は直口壺。口頸部の約1/3残存。頸部は上外方に僅かに外反して伸び口縁部に至る。口縁端部は丸みを帯びる。器面調整は、口縁部は横ナデ、頸部内面はハケナデ後、縦方向のナデ、外面はハケナデ後ナデを施す。頸部下部にヘラ状工具による刺突文が見られる。30は広口壺。口縁部・頸部のみ残存。頸部は上外方に僅かに外反して伸び、口縁部は外上方に開く。口縁端部は外傾する平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、頸部内面に斜方向・横方向のハケナデ、外面に縦方向のハケナデを施す。口縁部外面に粘土接合痕が残る。31は壺の肩部。頸部との境に突帯を巡らすもので、突帯の上に細かい刻み目を施す。突帯周辺と肩部に赤彩を施す。



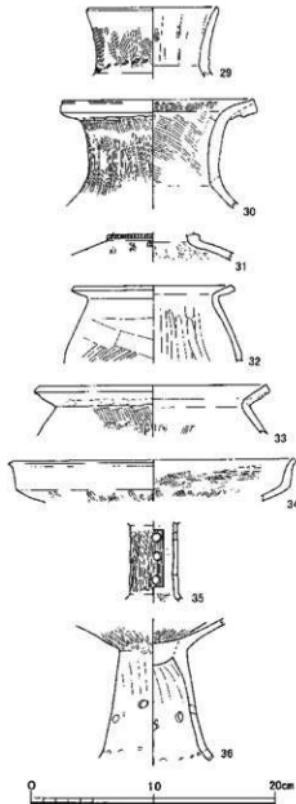
第15図 S.K.801平面面図(S=1/40)

32は壺。口縁部～体部上半の約1/5残存。体部から「く」の字に屈曲して外上方に直線的に伸びる口縁部を持つ。口縁端部は外傾する平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部外面にナデを施す。体部内面に禾本科植物の稭による条痕が見られる。33は壺。口縁部～体部上端の約1/5残存。体部から「く」の字に屈曲して外上方に僅かに内湾気味に伸びる口縁部を持つ。口縁端部は外傾する平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内面にハケナデ、体部外面にハケナデ後、縦方向のヘラ磨きを施す。34は高杯の杯部。口縁部～杯部の体部上半の約1/10残存。外上方に伸びる杯体部から明瞭な稭をなして上外方に外反して伸び口縁部をなす。口縁端部は外折して幅広の外傾する平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内外面に縦方向のヘラ磨きを施す。35は高杯の脚部。脚部は柱状で、器面調整は、外面に縦方向のヘラ磨きを施す。透孔は3段1対・2段1対の四方透孔が穿たれている。36は高杯。杯底部・脚部のみ残存する。脚部は下外方にはば直線的に伸びる。器面調整は、杯部内外面に縦方向のヘラ磨きを施す。円板充填により杯底部を作る。上段に9個、下段に16個の透孔が穿たれている。

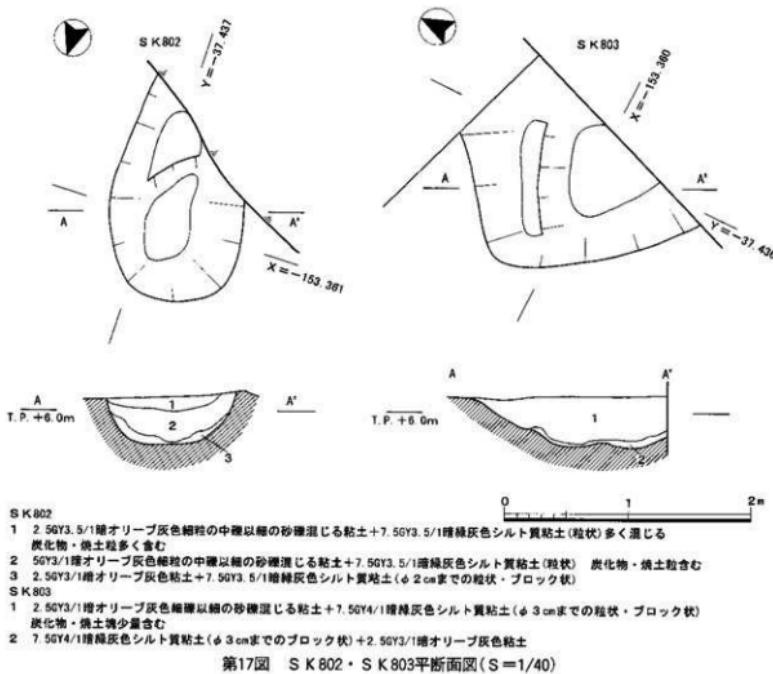
S K 801は、出土遺物から本来は第7面で検出される遺構であることがわかった。埋土からの出土遺物が、S I 701の埋土からの出土遺物と同時期のもので、かつ接合関係を持つことと、S K 801の南側の壁とS I 701の壁が平行に巡ることから、S K 801とS I 701は、廃棄の同時性を持ち、機能時において有機的な関係にあったと考えられる。

S K 802 (第17・18図、図版一〇・一一)

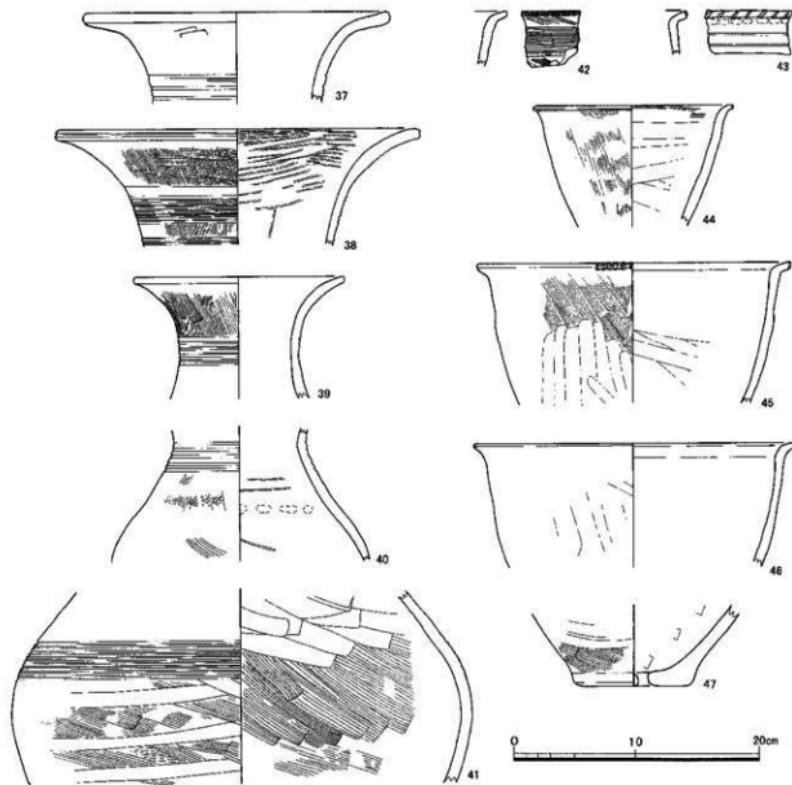
調査地北部のⅧ-16-7 G 地区で検出した。平面形状は、南東ー北西方向に長軸を持つ不整な椭円形を呈し、長径1.9m・短径1.1m・深さ約0.4mを測る。南西部部分は僅かにS K 801に切られる。断面形状・埋土については、第17図の通りである。主に、2層から寺沢・森井縦年の河内I-4様式(弥生時代前期後半)に比定できる土器の破片を主とする遺物が出土しており、そのうち11点(37~47)を図化した。図化した遺物の残存率は、39を除き各部の1/3~1/10程度である。37~39は広口壺の口縁部～頸部。いずれも、頸部から外上方に外反してラッパ状に開き口縁部に至る。37は口縁端部が丸みを帯びる。器面調整は、口縁部・頸部外面に横ナデ、頸部内面にナデを施す。残存部分で頸部に3条の沈線を間隔を空けて施す。38の口縁端部は丸く、1条の沈線を施す。器面調整は、内面にナデの後、口縁部に横方向のヘラ磨きを施し、外面に縦方向のハケナ



第16図 S K 801出土遺物実測図



デを施す。頸部に7条1帯の多条沈線と3条以上1帯の多条沈線を施し、口縁部と最上部の沈線の上部に横ナデを施す。39は口縁端部が外傾する平坦面を持つ。頸部に7条1帯の多条沈線を施す。40は広口壺の肩部。器面調整は、内面にハケナデ・ナデ後、部分的に横方向のヘラ磨き、外面に縦方向・斜め方向のハケナデ・ナデを施す。頸部に近い部分に5条の沈線をやや間隔を空けて施す。41は広口壺の体部。器面調整は、内外面ともに斜方向のハケナデ後、外面に部分的にナデを施し、内面の上位に板状工具によるナデを施す。体部上半寄りの部分に11条1帯の多条沈線を施す。42~46は、壺の口縁部~体部上半。いずれも、口縁部は体部から外上方に短く開き、口縁端部は平底気味なもの(42・43)と丸いもの(44~46)が見られる。器面調整については、42は内面にナデ、外面はハケナデ後、口縁端面に縦方向の刻み目、体部最上部に10条1帯の多条沈線を施す。44は内面に横方向のハケナデ後ナデ、体部外面に斜め方向のハケナデ後、部分的にナデ、口縁部に横ナデ、口縁部に横ナデを施す。45は口縁部に横ナデ、体部内面にナデ、体部外面に斜め方向のハケナデ後、下部に縦方向のナデを施す。口縁端部に部分的に縦方向の刻み目を施す。43は内面に横方向のハケナデ後ナデ、体部外面に斜め方向のハケナデ後、部分的にナデ、口縁部に横ナデを施す。口縁端面に斜め方向の刻み目、体部に残存部分で3条の沈線を施す。46は口縁部に横ナデ、体部内面に板状工具によるナデ、体部外面に禾本科植物の稈による斜め方向のナデ

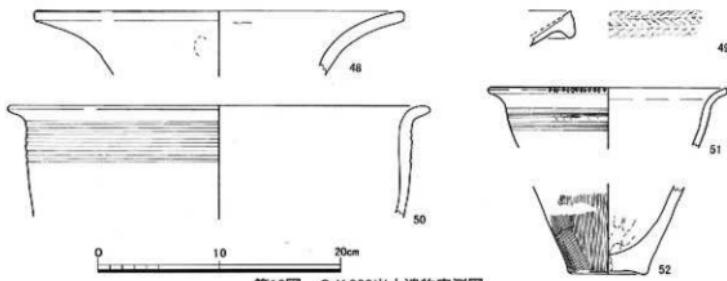


第18図 S K 802出土遺物実測図

を施す。47は甕もしくは壺の底部。内外面ともにナデを施す。底部の中央よりやや外側に焼成後穿孔を施す。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期後半に比定できる。

S K 803 (第17・19図、図版一一)

調査地北部の匂-16-6・7G地区で検出した。東側は調査地外に至り、北側は側溝に切られるため平面形状は不明であるが、南東-北西方向に長軸を持つ隅丸方形を呈すると推測される。東西長1.6m・南北長2.1m・深さ約0.4mを測る。断面形状・埋土については、第17図の通りである。主に、1層から寺沢・森井編年の河内I-4様式(弥生時代前期後半)に比定できる土器の破片が出土しており、そのうち5点(48~52)を図化した。図化した遺物の残存率は、各部の1/5~1/10程度である。48は広口壺の口縁部・頸部。頸部から外上方に外反してラッパ状に開き口縁部に至る。口縁端部は外傾する丸みを帯びた平坦面を持つ。器面調整は、内外面に横ナデを施す。49は広口壺の口縁部。垂下口縁をなし、口縁端面に羽状の刻み目を施す。内面は剥離しており、器



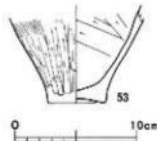
第19図 S K 803出土遺物実測図

面調整は不明。外面は横ナデ。50・51は壺の口縁部～体部上半。いずれも、口縁部は体部から外上方に短く開き、口縁端部は丸い。50の器面調整は、内外面に横ナデ。体部最上部に6条1帯の多条沈線を施す。51の器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内外面にナデを施す。口縁端部に綫方向の刻み目、体部上部に6条1帯の多条沈線を施す。52は壺。底部底部から斜め上方に直線的に立ち上がる体部を持つ。器面調整は、内面・底面にナデ、外面に綫方向のハケナデを施す。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代前期後半に比定できる。

溝(S D)

S D 801 (第20図、図版九)

調査地中央部のⅧ-16-7 F・G地区で検出した。ほぼ南北に伸び、南側はS E 102に切られる。検出長約4.5m・最大幅1.5m・深さ約0.3mを測り、底面は南に行くほど下がる。埋土は、S I 701の床上埋土と類似する。S D 801は、掘削段階でS I 701の埋土を切って掘られていたことを確認し、本来は第7面で検出すべき遺構であったが、埋土が類似するため検出を漏洩していたことがわかった。出土位置からS D 801の埋土に帰属することが明確な出土遺物は、弥生時代後期前葉に比定できる弥生土器壺1点(53)である。53は体部下部～底部のみ残存。上げ底気味のやや小振りな底部から上外方に立ち上がる体部を持つ。器面調整は、内面にヘラ削り、外面に綫方向のヘラ削りを施す。残存部分の上部にハケ目が見られる。弥生時代後期後半(寺沢・森井編年、河内V-0様式)に比定できる。S D 801の構築時期は、S I 701の廃棄・埋め戻し後である。

第20図 S D 801出土遺物
実測図

2) 遺構に伴わない出土遺物 (第21図、図版一二)

10層出土の3点(61～63)、16層出土の1点(60)、27層下面出土の3点(57～59)、29層出土の2点(55・56)、側溝掘削時に30層から出土した1点(54)を図化した。

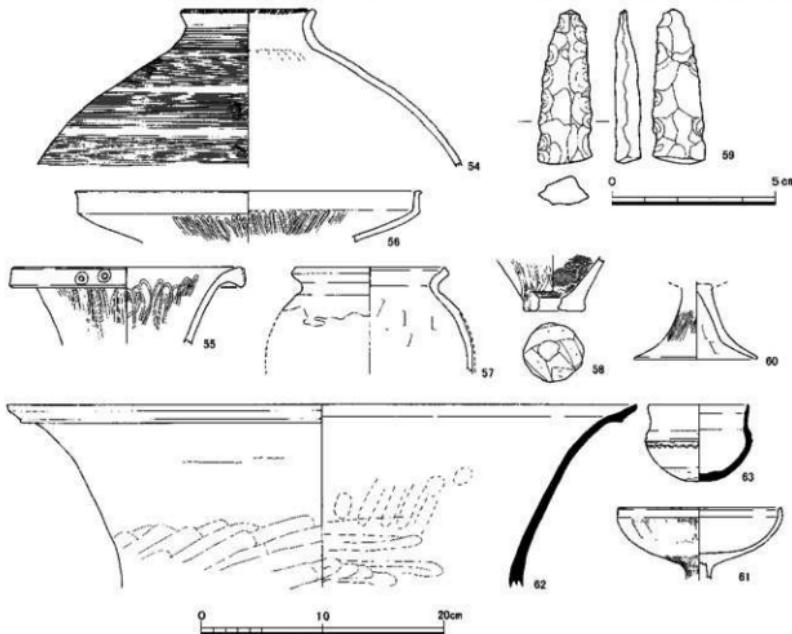
62は須恵器壺の口縁部。体部との接合部から上外方に外反した後、外上方に伸びて口縁部となる。端部の内面は強いナデにより内湾気味に收め、外側に内傾する平坦気味の面を持つ。端部の外面に1条の突帯を巡らす。器面調整は、上半部内外面に回転ナデ、下半部は外面に右斜方向

のナデ、内面に横方向のナデを施す。63は須恵器椀。丸い底部・体部を持ち、体部から上外方に伸びて口縁部をなす。口縁端部は内面に強いナデを施し内湾気味に細く收める。口縁部と体部の境に2条の突帶を巡らし、その下に1条の波状文を施す。62・63は田辺編年T K73型式(5世纪前半)に比定できる。61は土師器高杯。杯部・脚基部のみ残存。杯部は椀形で、口縁部は内湾し、端部は内傾する丸みを帶びた平坦面を持つ。器面調整は、外面に縱方向のハケ目が見られるが、磨耗のため、その他の調整は不明。

60は土師器高杯の脚部。下外方に直線的に伸びる柱状部から、外反して外下方に伸び裾部をなす。裾端部は丸い。器面調整は、柱状部外面に縱方向のハケナデ、裾部外面に横ナデ、内面にナデを施す。

57は弥生上器壺。口縁部～肩部のみ残存。小さく張った肩部から丸く屈曲し、外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は内傾する平坦面を持ち、上方に尖り気味に終わる。端面は幅広で無文である。器形は弥生時代後期の吉備系の壺に似るが、牛駒西麓産の胎土の特徴を持つ。58は弥生土器壺の底部。器面調整は、内面にハケナデ、外面にヘラ磨き、底面に板ナデを施す。底部の中央よりやや外側に焼成前穿孔を施す。時期は弥生時代後期前半に比定できる。59は石鎚。基部を欠く。現存部分で長さ4.65cm・幅1.5cm・厚さ0.9cmを測る。サヌカイト製。

55は弥生土器広口壺。口縁部～頸部上半のみ残存。上外方へ直線的に伸びる頸部から外上方に



第21図 造構に伴わない出土遺物 10層(61~63)、16層(60)、27層(57~59)、29層(55・56)、30層(54)

外湾して開き口縁部に至る。粘土紐を貼り付けて垂下させた口縁端部を持つ。口縁端面に現存部分で2個1組の竹管文が施された円形浮文が見られ、竹管文部分には赤彩を施す。56は弥生土器高杯の杯部。外上方に伸びる杯体部から明瞭な稜をなして上方に伸び口縁部をなす。口縁端部は外折して上に幅広の平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、体部内面に縦方向のヘラ磨き、体部外面に縦方向のヘラ磨きを施す。55~58は寺沢・森井編年の河内V-1様式(弥生時代後期前半)に比定できる。

54は弥生土器壺。体部の張りに比して小型の口縁部を持つ広口壺。球形の肩部から丸く屈曲し、上外方に短く伸びる口縁部を持つ。口縁端部は丸く、刻み目を施す。器面調整は、体部外面にハケナデ、体部内面に指ナデ、口縁部に横ナデ。頸部から体部にかけて櫛描直線文を施しており、上部から1単位12条、同じく16条、同じく18条、同じく14条以上である。時期は、寺沢・森井編年の河内II-1様式(弥生時代中期前半)に比定できる。

参考文献

●土器の形式・編年で参考とした文献

- ・寺沢 薫・森井貞雄 1989「2各地域の様式編年 1 河内地域」「弥生土器の様式と編年 近畿編I」木耳社
- ・田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- ・西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所

第3章 自然科学分析

久宝寺遺跡第63次調査(KH2005-63)検出遺構の放射性炭素年代測定業務

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、久宝寺遺跡第63次調査区で弥生時代後期の炉跡より出土した炭化物について加速器質量分析法(Accelerator mass spectrometry;AMS)による放射性炭素年代測定を実施する。AMS法は、放射性炭素原子をイオン化してその核種を直接、計測する年代測定法である(中村, 1999)。

1. 試料

試料は、炉跡の炭化物からなる堆積物下部より採取された炭化物1点である。

2. 分析方法

(1) 前処理と測定過程

試料は、前処理として、土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去を行う。前処理後、以下の化学処理を行う。

AAA処理(酸・アルカリ・酸処理)

HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去

NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去

HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去

酸化($C \rightarrow CO_2$)

試料をバイコール管に入れる。1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を同じバイコール管に入れる。管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。

精製($CO_2 \rightarrow CO_2$)

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO_2 を精製する。

還元($CO_2 \rightarrow C$: グラファイト)

真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-II)を使用した。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。なお測定については、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 測定結果

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、BPとはbefore presentの略とされるが、before physicsの簡略形とも言われている(中村, 1999, 木庭, 2000)。誤差として表現される土以下の数値は、年代値の標準偏差である(木庭, 2000)。年代値の誤差とは確率的な意味をもち、誤差が土1σである場合、まったく同様な測定を繰り返したとき、誤差範囲内に入る確率が68.3%であることを意味する(中村, 2001)。

暦年較正については、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させていている。暦年較正年代値とは、¹⁴C放射年代と樹木年輪年代との対応データを用いて計算された年代値である(中村, 2001)。¹⁴C年代測定では、大気中の放射性炭素年代濃度が過去数万年にわたって変化しないことが前提の一つとなっているが、放射性炭素年代濃度は過去2万年余りの間でも変動していることが判明している(木庭, 2000)。よって、¹⁴C年代値については、基準年(OBP=AD1950)を単純にずらすだけでは暦年代へ変換することが不可能である(中村, 1999, 2001)。このため、歴年代に近い年代を求めようとする場合には、過去の放射性炭素年代濃度の変化が記憶されている樹木年輪の¹⁴C放射年代と年輪年代の対応データを参照する必要がある(木庭, 2000)。本報告で使用しているStuiver et al(2005)の暦年校正曲線は、樹木年輪と年輪でカーバー出来ない年代範囲については高精度質量分析計によるサンゴのトリウム230Th/234U年代の成果や海底堆積物の縞模様の計数を用いて作成されている(木庭, 2000, 中村, 2001)。

3. 結果

測定結果のうち年代値を表1に、暦年較正年代値を表2に示す。

表1に記載される補正年代とは、測定試料の炭素同位体分別の補正を行った年代値のことである。炭素同位体分別の補正とは、試料によって異なるδ¹³C_{PPD}値をδ¹³C_{VPDB}値=-25‰に規格化することを指す(中村, 2001)。同位体分別とは、生物中の放射性炭素¹⁴C濃度については大気のそれの濃度に比べ少なくなる可能性が高く、その程度が同属であっても種によって異なったり、同じ個体

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 BP	δ ¹³ C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
KH2005-63	炭化物	1.880±40	-17.29±0.86	1.750±40	IAAA-50892

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

でも部位によって異なったりする現象について呼ばれる。またδ¹³Cは、¹³C/¹²Cを化石PDB(炭酸カルシウムからなる白亜紀の米国南カラリナ州Peedee層産箭石<やいし:Belemnite>の鞘)の比で標準化した値である(木庭, 2000)。

表2に示した相対比は、1σの範囲内に存在する暦年代校正值の確からしさを示す確率である。その数値は百分率によって表現され、その数値が大きいほど確率が高いと判断することできる。

なお、暦年較正年代値に用いられているcalは、calibratedを意味している(木庭, 2000)。暦年較正年代値については、測定試料の歴史上の意義を示すAD, BCで表される歴史年代(historical dates)と別物であることに留意する必要が指摘されている(中村, 1999)。

表2.暦年較正結果

試料名	補正年代	暦年較正年代(cal)		相対比	Code No.
KH2005-63	1876±39	cal AD 77-cal AD 142	cal BP 1.873-1.808	0.689	
		cal AD 148-cal AD 171	cal BP 1.802-1.779	0.175	IAAA-50892
		cal AD 193-cal AD 210	cal BP 1.757-1.740	0.136	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ)

2) 計算には表に示した丸め前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4. 考察

今回の分析試料は弥生時代後期の竪穴住居跡の炉跡より出土した炭化材である。今回の放射性炭素年代測定値を検討する上で、これまでに畿内を中心とする考古遺跡で実施された、弥生時代後期・弥生時代終末期～古墳時代初頭・古墳時代前期に関する、おもな放射性炭素年代測定結果について示す。この際、暦年較正年代値は特に限りがない場合、 2σ に相当する値となっている。

・弥生時代後期の放射性炭素年代値

弥生時代後期の測定結果では、池島・福万寺遺跡の弥生時代後期の遺構検出面である第11-1面で確認された壠の杭が 1890 ± 50 yrs BP(壠254深部杭)、 2070 ± 50 yrs BP(壠254浅部杭)、 1870 ± 50 yrs BP(壠452杭76)、 1950 ± 50 yrs BP(壠452杭169)、導水管が 1810 ± 40 yrs BPを示す(地球科学研究所・岸本, 2002)。これらの14C年代値の暦年較正年代値は、cal BC 80～240年前後である。国立歴史民俗学博物館による研究で実施された土器付着炭化物の14C年代測定では、奈良県山原本町唐古・鍵遺跡において、弥生時代後期(V様式)で 1910 ± 40 yrs BP、弥生時代後期(VI様式)で 1950 ± 40 、 1960 ± 40 yrs BPの年代値が報告されている(国立歴史民俗学博物館, 2004, 国立歴史民俗学博物館編, 2004, 春成・今村編, 2004)。大阪府東大阪市瓜生堂遺跡では、弥生時代後期(V様式)で 2000 ± 40 、 1960 ± 40 yrs BP(暦年較正年代値:cal BC40～AD130年前後)、弥生時代後期(V～VI様式)で 1950 ± 40 、 1990 ± 40 、 1975 ± 40 yrs BP(暦年較正年代値:cal BC40～AD130年前後)の年代値が測定されている(小林ほか, 2004)。また、愛知県の濃尾平野に位置する八王子遺跡出土の土器付着炭化物の14C年代測定では、八王子古宮Ⅱ式で 1945 ± 25 yrs BP(暦年較正年代値< 1σ >:cal AD50～AD80年)の年代値が得られている(山本・赤塚, 2004)。

・弥生時代終末期～古墳時代初頭から古墳時代前期の放射性炭素年代値

弥生時代終末期～古墳時代初頭から古墳時代前期の測定結果では、池島・福万寺遺跡の庄内式期の溝(第10-2面 溝20埋土2)から検出された木材が14C年代値で 1830 ± 50 yrs BP、暦年較正年代値でcal AD75～330の年代値を示している(地球科学研究所・岸本, 2002)。尺度遺跡では、庄内式期後半～布留式初頭と考えられる壠(壠819)の杭材が14C年代値で 1790 ± 40 yrs BP、暦年較正年代値でcal AD220～260年と報告されている[井上, 2003, 中村・井上編, 2003]。国立歴史民俗学博物館による研究で実施された土器付着炭化物の14C年代測定では、弥生時代終末期～古墳時代初頭頃(布留式期)で 1880 ± 40 、 1810 ± 40 yrs BP、古墳時代前期(布留式期)で 1815 ± 35 、 $1830 \pm$

30 yrs BPの年代値が報告されている(国立歴史民俗学博物館, 2004, 国立歴史民俗学博物館編, 2004, 春成・今村編, 2004)。大阪府東大阪市瓜生堂遺跡では、古墳時代前期(布留式期)で 1790 ± 40 yrs BP(暦年較正年代値:cal AD130~380年前後)の年代値が測定されている(小林ほか, 2004)。石川県金沢市大友西遺跡での土器付着炭化物の14C年代測定では、月影I式で 1879 ± 22 yrs BP(暦年較正年代値:calAD75~221年)の年代値が報告されている(木野瀬ほか, 2004)。愛知県の濃尾平野に位置する朝日遺跡、八王子遺跡出土の土器付着炭化物の14C年代測定のうち処理効率の高い測定結果では、廻間I式期前半で 1851 ± 21 yrs BP(暦年較正年代値:cal AD84~AD238年:朝日遺跡)、 1820 ± 25 yrs BP、 1780 ± 25 yrs BP(暦年較正年代値<1σ>:cal AD210~AD260年前後:朝日遺跡)、廻間I式期後半で 1862 ± 27 yrs BP(暦年較正年代値:cal AD80~AD240年:北道手遺跡)、松河戸I式期前半で 1767 ± 20 yrs BP、 1778 ± 22 yrs BP(暦年較正年代値:cal AD140~340年前後:八王子遺跡)、 1670 ± 25 yrs BP(暦年較正年代値<1σ>:cal AD380~415年:朝日遺跡)の年代値が得られている(木野瀬ほか, 2003・2004, 山本・赤塚, 2004)。また、年輪年代法では、庄内式期に併行すると考えられる石川県金沢市大友西遺跡井戸SE18用材(月影II式)がAD169年、大阪府堺市下田遺跡大溝SD1108腰掛け(布留式期最古相下田III式)がAD247年を示すとされる(森岡, 2001)。

・古墳時代前期以降の放射性炭素年代値

古墳時代前期以降において遺物付着物や、良好な一括資料を伴う遺構についての年代測定結果は非常に少ない。同位体分別未補正の年代値では、大阪府堺市大庭寺遺跡のTG232号窯跡灰原出土炭化材で 1630 ± 80 yrs BP、 1660 ± 80 yrs BP、 1620 ± 80 yrs BP、TG231号窯跡灰原出土炭化材で 1620 ± 80 yrs BP、 1540 ± 80 yrs BPの年代値が得られている(川崎地質, 1995)。また、大阪府堺市野々井遺跡ON231窯跡灰原出土炭化材では、 1540 ± 80 yrs BP、 1560 ± 80 yrs BPの年代値が報告されている(川崎地質, 1994)。奈良県奈良市佐紀遺跡SD6030上層資料出土木製品の年輪年代がAD412年を示し、八王子遺跡における須恵器TK73型式を伴う土器群とは併行するとされる宇田I式(赤塚, 2003)の土器付着炭化物の14C年代測定では、処理効率が低い測定結果ではあるが、 1631 ± 21 yrs BP(暦年較正年代値:cal AD387~AD526年:)の年代値が得られている(木野瀬ほか, 2004)。大阪府堺市陶邑古窯址群高藏寺地区窯跡TK59号窯(大阪府教育委員会, 1982:IV・2~IV・3段階)の灰原出土炭化材では、 1190 ± 20 yrs BP、 1200 ± 15 yrs BP、 1220 ± 30 yrs BPの同位体分別未補正の年代値が得られている(山田, 1987)。中世の窯跡では、愛知県瀬戸市に所在する遺跡の灰原出土炭化材で、中洞窯跡(中心時期:山茶碗8形式, 古瀬戸中期I~II段階)において 635 ± 25 yrs BP、 675 ± 25 yrs BP、宇トゲ窯跡(中心時期:古瀬戸後期I~IV段階)において 575 ± 30 yrs BP、 630 ± 30 yrs BPの年代値となることが示されている(川添, 2003)。

以上、各時代の主な放射性炭素年代測定結果を概観してきた。今回の測定結果に類似する値は、弥生時代後期および弥生時代終末期~古墳時代初頭から古墳時代前期の測定結果に認められる。今回の測定試料が弥生時代後期の竪穴住居跡出土炭化物であることから、年代測定値としては大きく矛盾するものではない。ただし、遺物・遺構に基づく相対年代と放射性炭素年代測定結果の対応関係については、各地域における測定結果の蓄積により評価を行っていく必要があり、今後の情報の蓄積をもって再評価していく必要がある課題である。

引用文献

- 赤塚次郎, 2003, 中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題. 第5回 考古科学シンポジウム発表要旨, 79-84.
- 地球科学研究所・岸本広樹, 2002, 放射性炭素年代測定. 「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要XXIII-98-1調査区(1998年度)の調査概要-」, (財)大阪府文化財調査研究センター, 108-111.
- 春成秀爾・今村峯雄編, 2004, 弥生時代の実年代 炭素14年代をめぐって. 学生社, 253p.
- 川崎地質, 1994, 野々井西遺跡出土初期須恵器の14C年代測定. 「野々井西遺跡・ON231号窯跡 近畿自動車道松原すさみ線建設工事に伴う発掘調査報告書(本文編)」,
- 川崎地質, 1995, 14C年代測定. 「陶邑・大庭寺遺跡IV 「近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書 本文編」, 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会, 359-361.
- 川添和暁, 2003, 窯業遺跡における理化学年代測定について. 第5回 考古科学シンポジウム発表要旨, 103-105.
- 木野瀬正典・赤塚次郎・小田寛貴・中村俊夫・山本直人, 2003, 愛知県朝日遺跡・月繩手遺跡出土の土器付着炭化物の放射性炭素年代. 第5回 考古科学シンポジウム発表要旨, 95-101.
- 木野瀬正典・赤塚次郎・小田寛貴・山本直人・中村俊夫, 2004, 尾張地域の弥生時代・古墳時代の土器に付着した炭化物の放射性炭素年代. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XV), 名古屋大学年代測定総合研究センター, 18-25.
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本 稔・陳 建立・松崎浩之・秋山浩三・川瀬貴子, 2004, 大阪府瓜生堂遺跡出土弥生・古墳時代出土土器の14C年代測定. 「瓜生堂遺跡I 近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-考察・分析・写真図版編-」, (財)大阪府文化財センター, 715-726.
- 国立歴史民俗学博物館, 2004, 学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-」. 研究結果, 炭素14年代測定データ一覧表(1)~平成15年度まで.
(但しPDFファイルによる:
http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/katudoh/sousei/yayoinoukou/data_01.pdf)による).
- 国立歴史民俗学博物館編, 2004, 繩文晩期~弥生前期AMS測定値と校正年代. 季刊考古学, 88, 45-48.
- 森岡秀人, 2001, 弥生時代遺跡の年代. 季刊考古学, 77, 22-26.
- 中村ますみ・井上智博編, 2003, 「尺度遺跡II-国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書-」, (財)大阪府文化財センター, 228p.
- 中村俊夫(1999) 放射性年代測定. 長友恒人編, 「考古学のための年代測定学入門」, 古今書院, 2-36.
- 中村俊夫(2001) 放射炭素炭素年代とその高精度化. 第四紀研究, 40, 445-459.
- 井上智博, 2003, 放射性炭素年代測定(1998~2000年度実施). 「尺度遺跡II-国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書-」, (財)大阪府文化財センター, 210-211.
- 山田 治, 1978, 泉北丘陵須恵器窯跡の14C年代測定. 「陶邑III-本文編-」, 大阪府教育委員会, 145-146.
- 木庭元晴, 2000, 「畿内およびその周辺の考古遺物・遺跡の空間的・時系列的データベース作成-考古編年による放射性炭素年代軸の確立-」. 関西大学文学部, 83p.
- 山本直人・赤塚次郎, 2004, 濃尾平野における弥生後期~古墳前期の炭素14年代値測定と炭素安定同位体比. 炭化物の放射性炭素年代. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XV), 名古屋大学年代測定総合研究センター, 136-143.

第4章まとめ

今回実施した久宝寺遺跡第63次調査では、弥生時代前期後半から近代までの遺構・遺物を検出した。その中から特筆すべきものを挙げていく。

第8面で弥生時代前期後半の土坑(S K 802・S K 803)を検出し、その埋土から土器が出土した。当調査地周辺の当該時期の遺構・遺物としては、当調査地から400mほど南東側の跡部遺跡第12次調査地で、土坑・溝・落込み・小穴が検出されている。同じく跡部遺跡第27次調査地では、土坑が検出され、その埋土から多量の土器片が出土しており、いずれも居住域に伴うものと考えられている。なお、遺構に伴ってはいないが、当調査地から200m余り南東側の跡部遺跡第5次調査地においても、弥生時代前期後半の土器片が出土している。これらの遺構・遺物はいずれも当調査地の南東側で検出されており、当該時期の居住域として捉えることが可能である。今回検出した土坑の埋土から出土した土器は、残存率が1/3以下のものが殆どであることから、これらの土坑は破損した土器を廃棄するために掘られたものであり、当調査地は当該時期の居住域の一部であったと考えられる。

第7面で検出した弥生時代後期前半の竪穴住居(S I 701)と、第8面で検出した同時期の土坑(S K 801)については、当該時期の居住域の存在を具体的に示す遺構として注目できる。当調査地周辺では当該時期の建物が検出されていないことから、今回検出した竪穴住居とそれに伴う土坑は、当調査地周辺に居住域が存在したことを見る上で、貴重な資料となる。ちなみに、当該時期の遺構としては、当調査地の西側70~90mに位置する第29次調査2・3調査区で検出された畦畔状遺構を挙げることができる。竪穴住居からなる居住域と、その西側に畦畔状遺構が展開していた景観を復元でき、畦畔状遺構が居住域の西端を区画するものであったと推測できる。

第8面・第7面で検出した弥生時代前期後半・後期前半の居住域の存在を示す遺構・遺物が、南側に展開する跡部遺跡の居住域の一部に帰属するのか、当調査地周辺に展開した別の居住域に帰属するのかについては、周辺地において今後実施されるであろう調査によって明らかになるであろう。

第4面では、古墳時代前期の溝群を検出した。当該時期の遺構としては、当調査地南西側の第29次調査地で水田が検出されている。当調査地で検出した溝群は、水田に伴うものではないことから、南西側とは異なる土地利用がなされていたことがわかった。

第2面で検出した奈良時代前半から平安時代前半の流路201の埋土から「郡口」(□部分は不詳)と墨書きされた土師器片が出土した。当調査地南東側の第29次調査4調査区で検出された自然河川(当調査地検出の流路201に続く可能性がある)の埋土からは「之中上丁石津連乎黑万」と墨書きされた木簡が出土している。「上丁」は「定番している者、出勤している者」を意味することから、近接位置に役所の存在した可能性が想定されていた。今回の調査で出土した墨書き土器は、第29次調査で出土した木簡と併せて、渋川郡の郡衙の存在を示唆する資料として注目できる。

第1面で検出した近世以降の水田耕作に伴う遺構群については、周辺地域における近世から近代初頭まで展開していた水田と、その間に構築された島畑からなる景観の一部を構成するものである。井戸(SE 101)の跡を利用したアンカー埋設遺構は、近代初頭以降の近代化により、近世

的な景観に近代的な要素が加わっていく一つの様相を窺い知ることのできるものである。

注記

- 註1 坪田真一 1994「2. 跡部遺跡第12次調査」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
(財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 坪田真一 1999「III 跡部遺跡第27次調査(A T97-27)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』
(財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 安井良三他 1991『跡部遺跡発掘調査報告—大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸—』(財)八尾市文化財
調査研究会報告
- 註4 坪田真一 2001「大阪・久宝寺遺跡」『木簡研究 第26号』木簡学会

参考文献

●周辺調査地における既往調査成果について

- ・原田昌則・坪田真一他 2003『財団法人八尾市文化財調査研究会報告74 久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書
—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う一』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子・荒川和哉 2003「I 跡部遺跡第33次調査(A T2002-33)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』
(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2004「13. 久宝寺遺跡第52次調査(K H2003-52)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業
報告』(財)八尾市文化財調査研究会

●層序の記載に関する用語・区分について

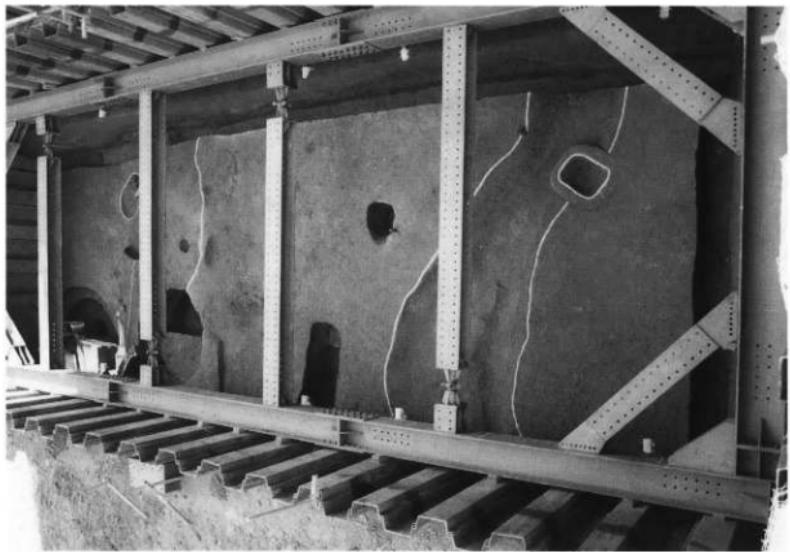
- ・堆積学研究会 1998『堆積学辞典』朝倉書店
- ・William J. Fritz & Johnnie N. Moore著、原田一志訳 1999『層序学と堆積学の基礎』(株)愛智出版



第1面全景(北から)



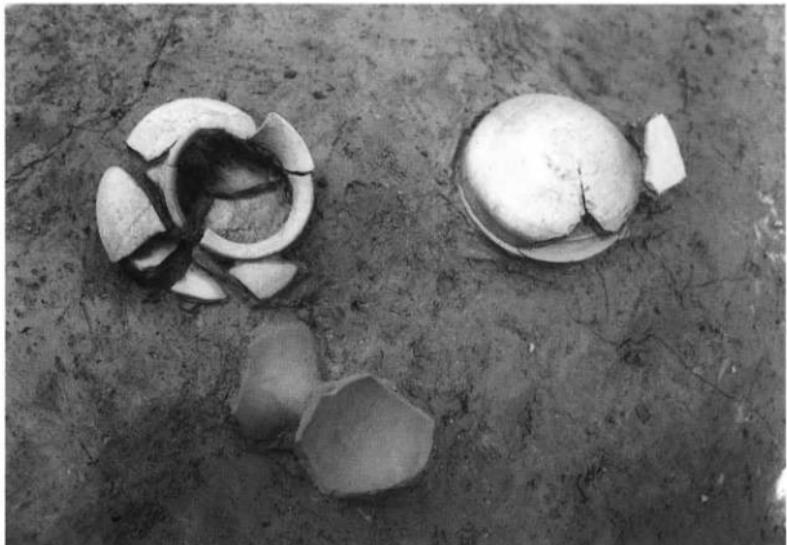
流路201部分(東から)



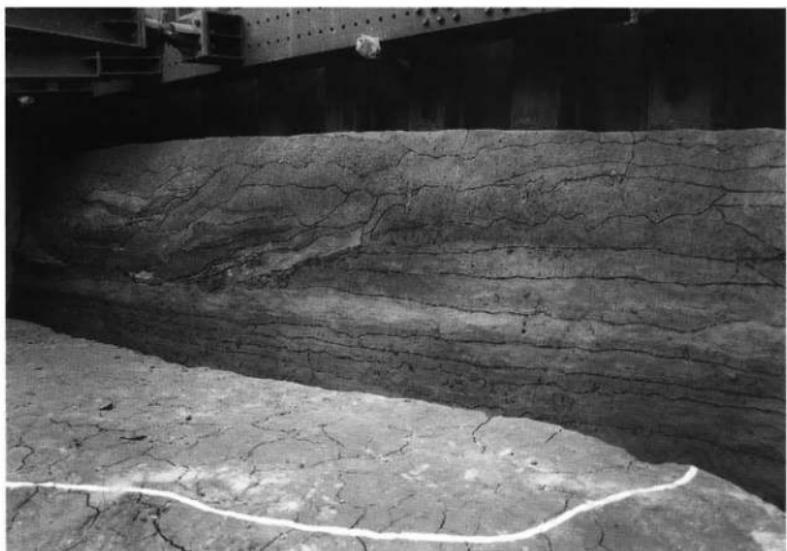
第3面全景(北から)



流路301部分(東から)



流路301遺物出土状況(南から)



流路201・流路301部分西壁断面(北東から)



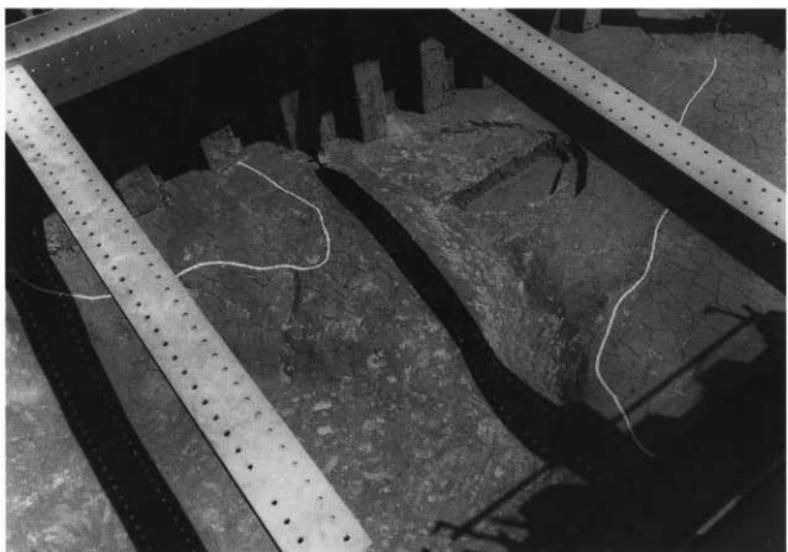
第4面全景(北から)



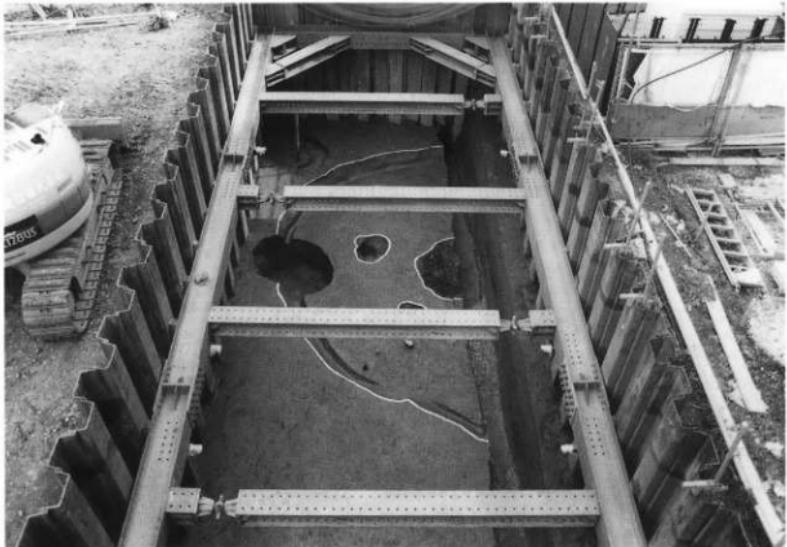
第4面造構部分(東から)



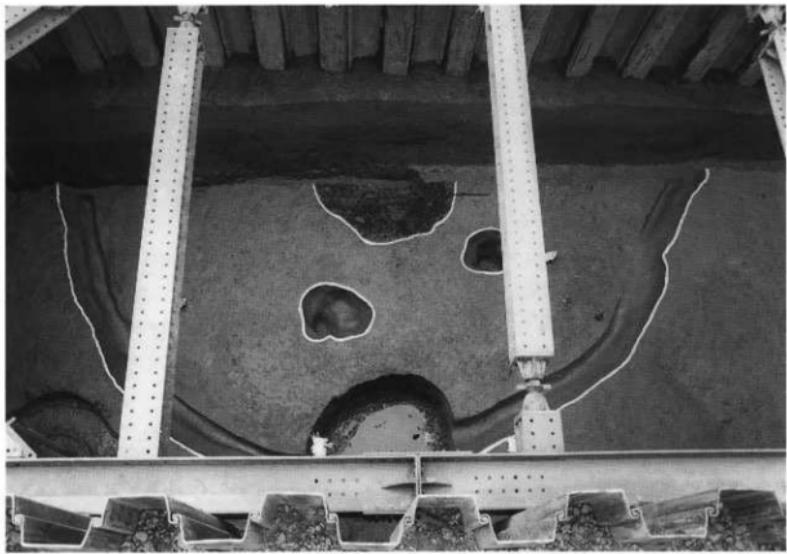
第6面全景(北から)



S O 601検出状況(北西から)



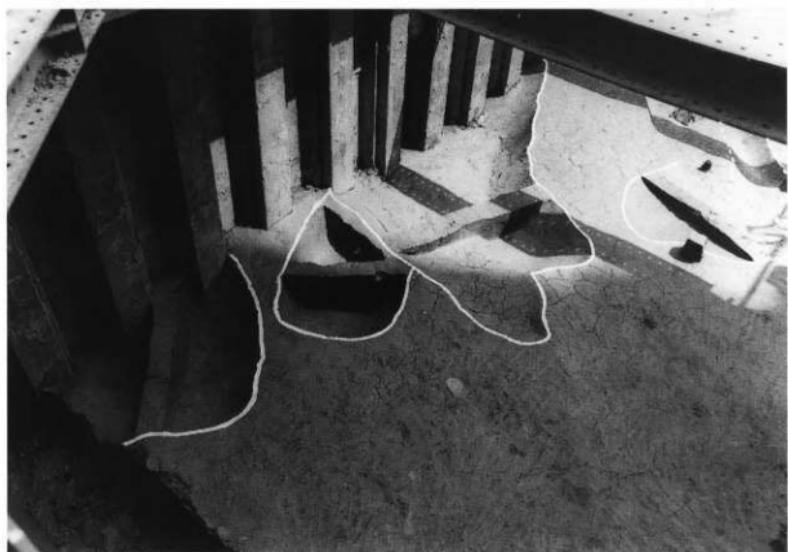
第7面全景(北から)



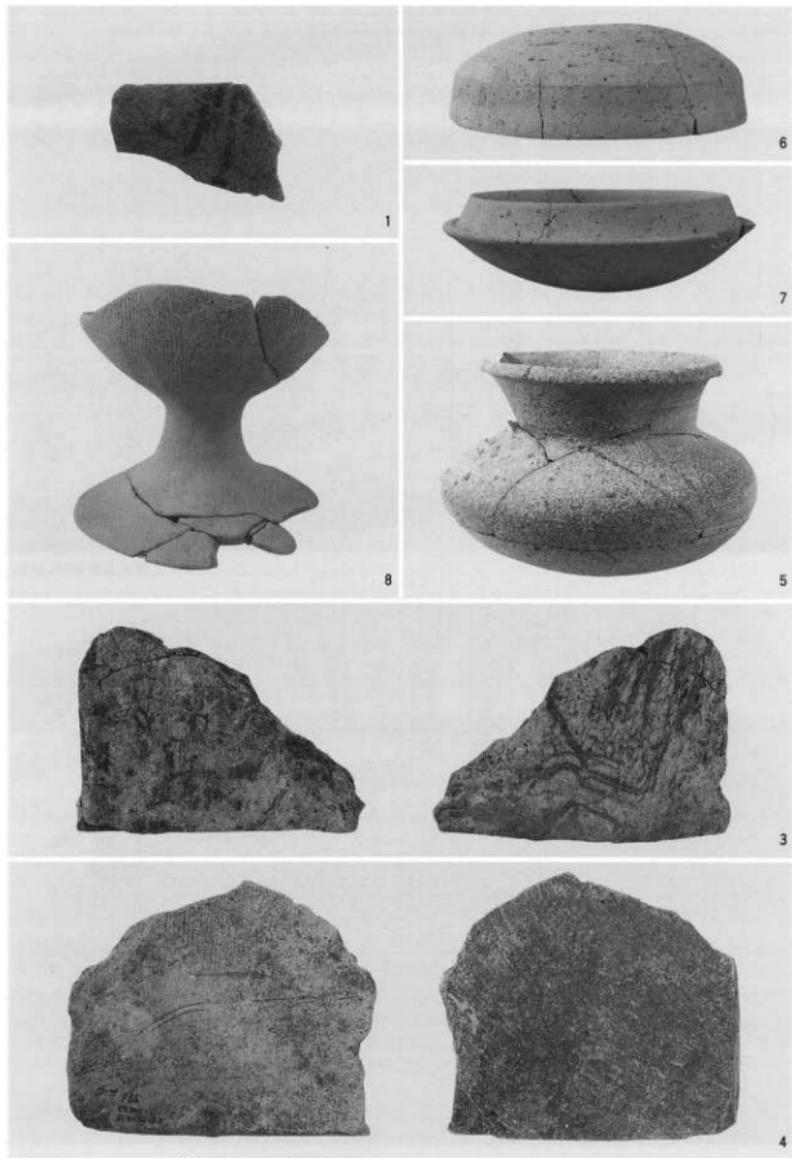
S 1701検出状況(東から)



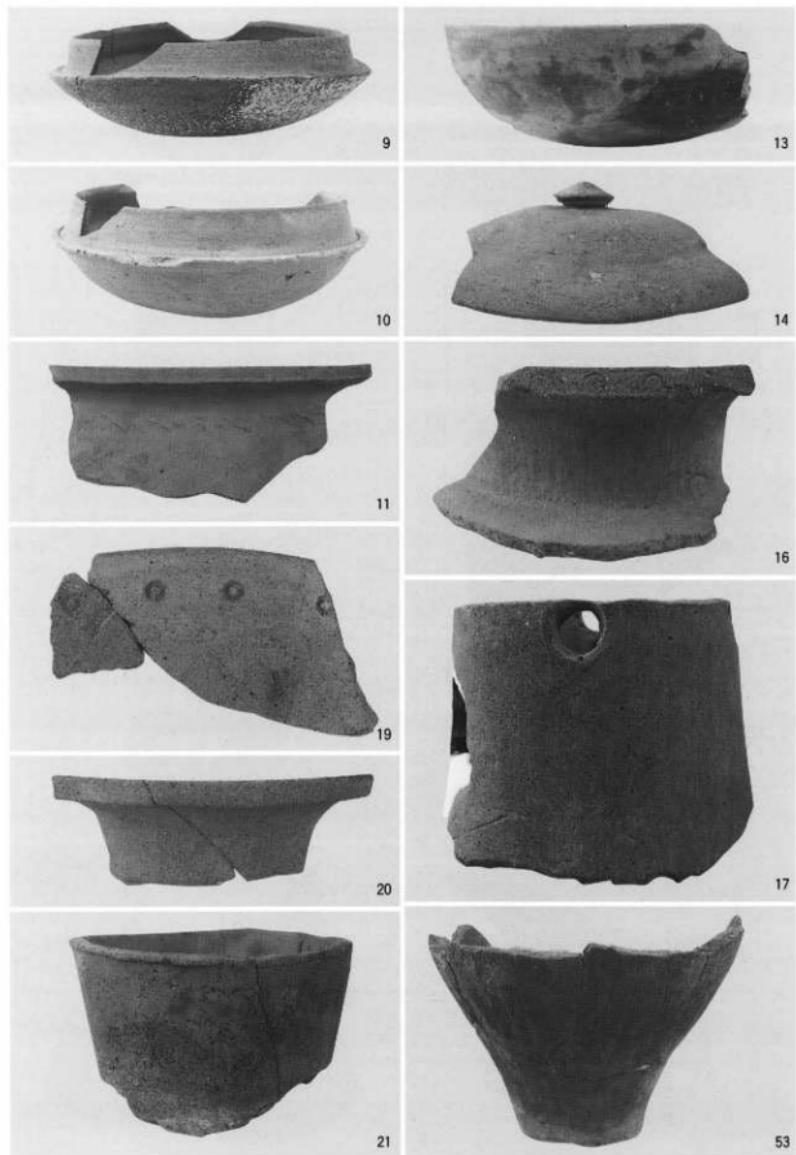
第8面全景(北から)



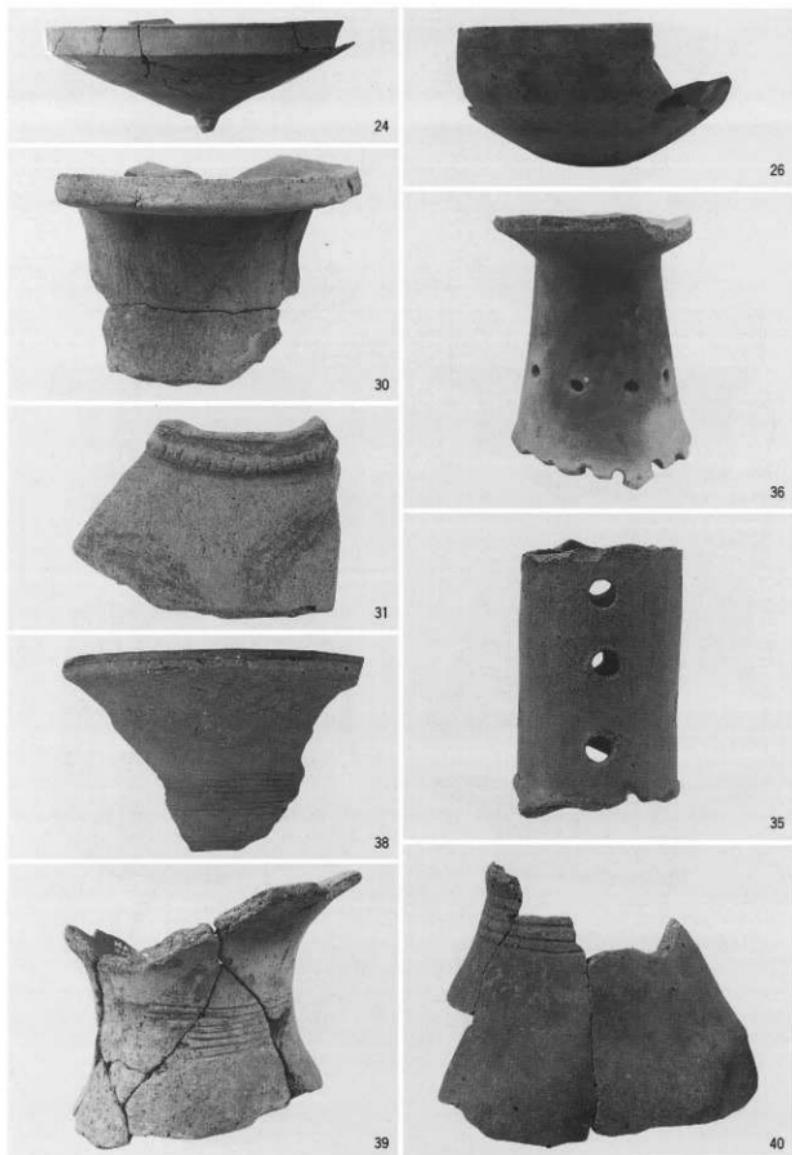
S K 801・S K 802・S K 803検出状況(北西から)



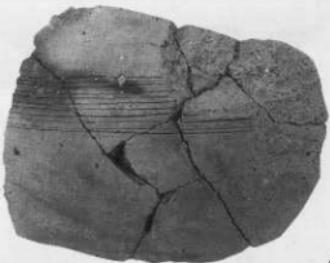
流路201(1・3・4)、流路301(5～8)出土遺物



流路301(9~11・13~14)、S O 601(16・17)、S D 801(53)、S I 701(19~21)出土遺物



S I 701(24・26)、S K 801(30・31・35・36)、S K 802(38～40)出土遺物



41



42



45



47



49



43



50

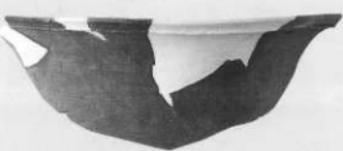


51

S K 802(41~43・45・47)、S K 803(49・50・51)出土遺物



61



62



60



63



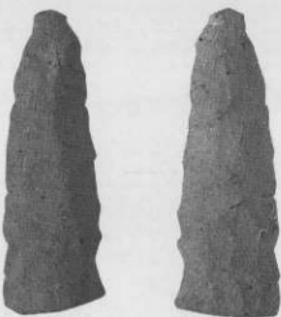
57



55



54



59

遺構に伴わない出土遺物 10層(61～63)、16層(60)、27層下面(57・59)、29層(55)、30層(54)

VI 久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市龍華町2丁目地内で実施した大阪竜華都市拠点地区2街区貯留槽設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が独立行政法人都市再生機構西日本支社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年7月27日から10月27日(実働45日)にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は延べ154.5m²である。
1. 現地調査においては、伊藤静江・飯塚直世・垣内洋平・曹龍・田島宣子・中澤聰司・藤原由理子・村井俊子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年12月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－山内千恵子・図面レイアウト－荒川、図面トレース－山内、遺物写真撮影－垣内が行い、他に市森千恵子・伊藤・鈴木裕治・田島・徳谷尚子・村井の協力を得た。
1. 本書の執筆および構成は、荒川が担当した。
1. 基準点測量は、株式会社かんこうに委託した。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。
独立行政法人都市再生機構西日本支社、株式会社金山兄弟社
1. 出上遺物の形式・編年で参考とした文献については、430頁に示した。

本 文 目 次

第1章 はじめに	407
第2章 調査概要	408
第1節 調査の方法と経過	408
第2節 層序	409
第3節 検出遺構と出土遺物	415
1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物	415
2) 遺構に伴わない出土遺物	428
第3章 まとめ	429

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	407
第2図	調査区設定図および地区割図	408
第3図	1調査区西壁・南壁、2調査区西壁断面図	413-414
第4図	第1面検出遺構平面図	416
第5図	第2面検出遺構平面図	418
第6図	第3面検出遺構平面図	420
第7図	堤401出土遺物実測図	421
第8図	第4面検出遺構平面図	422
第9図	S D501出土遺物実測図	424
第10図	第5面検出遺構平面図	424
第11図	S D502出土遺物実測図	425
第12図	S D504出土遺物実測図	426
第13図	S D602断面図	427
第14図	第6面検出遺構平面図	427
第15図	遺構に伴わない出土遺物実測図	428

写 真 目 次

写真1	1調査区 23層内板石出土状況	429
-----	-----------------	-----

図 版 目 次

図版一	調査地全景	図版五	1調査区 第6面全景
	1調査区 第1面全景		1調査区 S D601断面
図版二	1調査区 第2面全景	図版六	2調査区 第4面全景
	1調査区 第3面全景		調査作業風景
図版三	1調査区 第4面全景	図版七	堤401・S D501・S D502出土遺物
	1調査区 提401	図版八	S D504・遺構に伴わない出土遺物
図版四	1調査区 第5面全景		
	1調査区 S D502土器出土状況		

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市北西部、現在の行政区画では北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北龜井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目に当たり、東西約1.7km、南北約1.8kmの範囲に展開する縄文時代晩期以降の複合遺跡である。

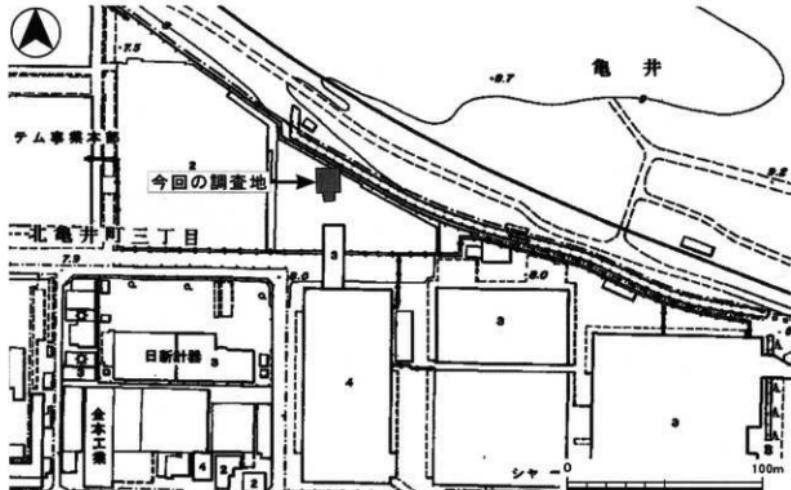
久宝寺遺跡を含む中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に面されている河内平野の南部に当たる。河内平野の南部は、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下している。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地に展開する遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +6.6～12.0mを測る。

久宝寺遺跡第65次調査を実施した久宝寺遺跡の南部では、竜華操車場跡地とその周辺の再開発に伴う各種工事によって破壊される遺跡を対象とした発掘調査が、(財)大阪府文化財調査研究センター(平成14年4月以降、大阪府文化財センター。以下、府センターとする)、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会とする)により、継続的に実施されている。

本書で報告する久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65)は、上記事業の一環として、当調査研究会が、独立行政法人都市再生機構西日本支社の委託を受けて実施したものである。

久宝寺遺跡における既往の調査の概要、および久宝寺遺跡を巡る地理・歴史的環境の詳細については、本書「I 久宝寺遺跡第23次調査」第2章(2～9頁)を参照されたい。

当調査地周辺においては、府センターによる竜華東西線、水処理施設に伴う調査、当調査研究



第1図 調査地周辺図(S=1/2500)

会による久宝寺南駅前線に伴う第23次調査1～3調査区(KH97-23-1～3)、第30次調査1調査区(KH99-30-1)、工場建設に伴う第34次調査(KH2000-34)が実施されている。

当調査地に隣接する府センターによる竜華東西線・水処理施設に伴う調査地では、弥生時代前期に比定される4条の平行溝群(竜華東西線)、弥生時代中期から後期初頭の水田耕作に伴う水路・畦畔・高まりと高まり上に単独で建てられた竪穴住居(水処理施設)、弥生時代後半の竪穴住居(水処理施設)、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の畑耕作に伴う小溝群(竜華東西線・水処理施設)・墳墓群(水処理施設)、古墳時代前期前半の流路・河川とそれに伴う堤(竜華東西線・水処理施設)、古墳時代後期の竪穴住居(竜華東西線)、奈良・平安時代の集落に伴う掘立柱建物・井戸(水処理施設・竜華東西線)、平安時代の畦畔(竜華東西線)などが検出されており、今回の調査に際しては、これらの遺構と関連する遺構群の検出が予測された。

第2章 調査概要

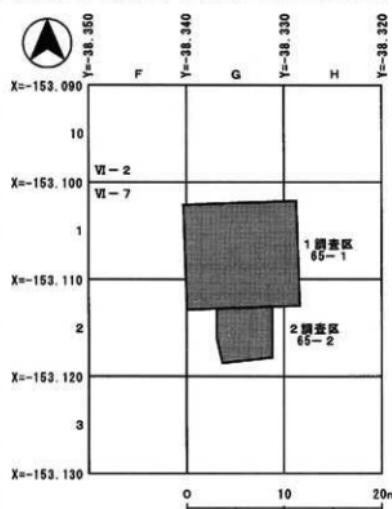
第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65-1・2)は、大阪竜華都市拠点地区2街区貯留槽設置工事に伴い実施したものである。

調査地は、八尾市龍華町2丁目に位置する。今回の調査では、貯留槽部分と貯留槽に接続する管路部分が調査対象であるため、貯留槽部分を1調査区(KH2005-65-1)、管路部分を2調査区(KH2005-65-2)と呼称した。機械掘削と排土搬出の都合上、1調査区の調査を先行し、1調査区の調査終了後、2調査区の調査を実施した。

1調査区は、東西11.6m・南北10.8mの方形を呈し、面積は125.28m²を測る。2調査区は、南北5.75m・東西5.75mの不整な方形を呈し、面積は29.22m²を測る。1調査区・2調査区の延べ面積は154.5m²を測る。調査に際しては八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき、1調査区については現地表(T.P.+8.3m前後)下1.4mを重機により掘削・除去した後、以下3.4mを人力によって掘削した。2調査区については、現地表下1.4mを重機により掘削・除去した後、以下約1.6mを人力によって掘削した。

なお、1調査区調査時に南側と西側に地層断面観察用の壁(上幅0.5m)を設定し、地層断面の記録保存を行った。その際、①壁の崩落の予防、②壁法面の勾配による遺構



第2図 調査区設定図および地区割図(S=1/500)

検出面積減少の抑制のため、南壁で3回、西壁で2回に分けて壁の設定・地層断面の記録保存・人力による壁の除去を行った。

調査区の地区割については、竜華操車場跡地とその周辺において継続する調査に対応するため、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した(本書Iの14-15頁参照)。今回の調査地は、この地区割によれば、VI-7-1~2 G・H地区に位置する(第2図)。

遺構検出面の呼称については、重機による掘削が終了し、人力による調査で遺構が検出された面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した。(例、S E 101=第1面検出の井戸1)。

調査の結果、弥生時代前期から中期に比定できる溝、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に比定できる土坑・溝、古墳時代前期に比定できる堤・流路・土坑・穴、飛鳥時代前期以降に比定できる土坑・溝、平安時代に比定できる溝、中世に比定できる小穴・溝、中世末から近世初頭に比定できる溝、近世初頭以降に比定できる土坑、近世に比定できる水田・鳥畠・井戸・竹樋を埋設した溝を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)3箱を数える。

整理業務は、遺物洗浄など現地調査時に一部着手したものもあるが、基本的には現地調査終了後随時実施した。図面・写真・遺物の整理・調査・収集を行い、報告の刊行に至る作業を実施した。遺物・遺構に関しては、報告図面作成・トレース・報文作成を行なった。これら一連の作業の後、図面・図版のレイアウト・全文体の検討・体裁の調整等の編集作業を行い、平成17年12月28日に終了した。

第2節 層序(第3図)

当調査地では遺構埋土を除く地層を51層確認した。各単層については後で記載するが、先ず、把握しやすいように分類し、基本層序とした。

第0層:客土・盛土層。竜華操車場跡地とその周辺における再開発が始まるまで、工場に関連する建物が建っており、その基礎埋土である0-2層と建物撤去時の整地土である0-1層に分けられる。上面の標高は、T.P.+8.25m前後。層厚は、0.8~1.4m

第I層:近世以降の水田耕作土で、1調査区南端・2調査区に見られる。中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルトを主体とする。グライ化により暗オリーブ灰色・暗緑灰色を呈する。糸根状の酸化鉄が少量見られる。国産陶磁器が出土。上面の標高は、T.P.+7.2~7.3m。層厚は、約0.5m。1層・水田101耕作土・水田201耕作土がこれに相当する。

第II層:近世以降の鳥畠盛土・耕作土。既存建物建設時以降に破壊されており、1調査区旧用水路沿いに残る。中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルトを主体とする。オリーブ褐色・暗灰黄色を呈する。斑点状の酸化マンガン・酸化鉄が見られる。上面の標高は、T.P.+7.4m。層厚は、約0.5m。2・3層がこれに相当する。第I・II層の下面是第1・2面。

第III層:平安時代の畑耕作土。1調査区の中央部以北に見られる。暗灰黄色を呈する中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルトの单層からなる。斑点状の酸化マンガン・酸化鉄が見られる。上面の標高は、T.P.+6.9m前後。層厚は、約0.25m以下。須恵器・黒色土器の破片が出土。4層のみがこれに相当する。第III層の下面是第3面。

第IV層:古墳時代前期以降の水成層。砂疊・シルト質粘土。上部は酸化鉄分の沈着により褐色を

基調とし、下部は灰色を呈する。一部、人為的な痕跡が見られるが、主に古墳時代前期の築堤以降の河川からの洪水・浸水、破堤に伴い堆積した層と見られる。上部は後の畑耕作の影響による斑点状の酸化マンガン、糸根状・しみ状の酸化鉄が見られる。畑耕作の及んでいない部分では上面に粗粒の砂で充填された荷重痕が見られる。下部には、巣穴が見られる層がある。上面の標高は、T.P. +6.7~6.9m。層厚は、最大約1.2m。主に、砂礫中から弥生土器・土師器の破片が出土。7~22層がこれに相当する。

第V層：古墳時代初頭の耕作土。細粒の砂が混じる粘土質シルト。オリーブ黒色・暗緑灰色を呈する。上面の標高は、T.P. +5.6~5.7m。層厚は、約0.2m。弥生時代後期後半~古墳時代初頭の土器が出土。23・24層がこれに相当する。第V層上面は第4面検出遺構構築面、下面是第5面。

第VI層：弥生時代後期~古墳時代初頭の水成層。上位の緑灰色ないし灰色を呈する粘質土を主体とする部分(第VI-①層、25~33層)と、下位の灰色を呈する砂礫を主体とする部分(第VI-②層、34~37層)に分けられる。第VI-①層には、分解の進んだ植物遺体の葉層を挟む層や巣穴が見られる層が目立つ。第VI-②層の砂礫には、平行層理・平板型斜交層理が見られる。上面の標高は、T.P. +5.4~5.5m。層厚は、最大約1.2m。出土遺物は、砂礫層上部から土器片が僅かに出土しているが、時期を比定できるものはない。南に隣接する府センターによる竜華東西線に伴う調査区では、第VI-②層に相当する層は、弥生時代後期・古墳時代初頭の河川とされている。

第VII層：弥生時代中期と推定される盛土・人為的な搅拌層。灰色を呈する中粒の中疊以細の礫が多く混じる粘質土(38・39層)、または、下位層のブロック土を主体とする(40層)。1調査区南西部の高まり以外の部分では塊状をなし、盛られた後に搅拌を受けていたと推測できるが、水田耕作土と断定はできない。出土遺物はなく、時期を明確に比定できない。上面の標高はT.P. +4.3~4.75m。層厚は高まり部分で0.55m。

第VIII層：弥生時代前期の黒色帯・緑色帯。オリーブ黒色・暗オリーブ灰色を呈する粘質土・粘土を主体とする。見た目は、黒色・緑色の土が交互に重なっている。上面に乾痕が見られ、地表面にあったことを窺わせる。層中に巣穴が見られる。出土遺物はなく時期を明確にできないが、周辺調査地の調査成果から弥生時代前期に比定できる。上面の標高はT.P. +4.2~4.3m。層厚は0.3~0.4m。41~44層がこれに相当する。第VIII層上面は第6面。

第IX層：縄文時代晚期以前の水成層。最上部(45層)は、オリーブ黒色を呈する砂混じる泥で、上面に上位層で充填された痕痕が見られる。その下位(46・47層)は、緑灰色を呈する泥質砂ないし砂。層中に巣穴が見られる。出土遺物はなく時期を明確にできないが、周辺調査地の調査成果から縄文時代晚期以前に比定できる。上面の標高はT.P. +3.8~4.0m。層厚は0.4m以上。

各単層については、以下に記載する。酸化鉄・酸化マンガンの有無、生物擾乱の有無などで、基本層序の記載と重複する部分は省いている。水田耕作土以外の遺構埋土については、第3図に記載しているので、そちらを参照されたい。

0~1層：2・3層のブロックを主体とし、部分的に2.5Y5/4黄褐色細粒砂~極細粒砂と極粗粒砂~中粒砂の葉層の互層を挟む。

- 0-2層：粗粒の中疊以細の砂礫質土。
- 1層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト+水田101耕作土のプロック層少量。
- 水田101耕作土：7.5GY3.5/1暗緑灰色中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト。
- 水田201耕作土：2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト(細粒砂～極細粒砂多)。炭化物少量含む。
- 2層：2.5Y4/3オリーブ褐色細粒の中疊以細の砂礫混じる砂質シルト。
- 3層：2.5Y4.5/2暗灰黄色中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト。
- 4層：2.5Y4/2暗灰黄色中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト。
- 5層：2.5Y4/2暗灰黄色細粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト(極粗粒砂～粗粒砂多)。
- 6層：2.5Y5/2暗灰黄色シルト質細粒の中疊以細の砂礫。所により、下部に5Y5/2灰オリーブ色細粒砂～極細粒砂と板粗粒砂～中粒砂の葉層の互層。酸化鉄(しみ状)。
- 7層：2.5Y5/2暗灰黄色細粒～極細粒砂質シルト。所により、細粒の中疊以細の疊混じる。
- 8層：2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質細粒～極細粒砂。所により、2.5Y4/2暗灰黄色中粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト。
- 9層：2.5Y4/2暗灰黄色中粒の中疊以細の泥質砂礫。
- 10層：10YR4.5/2灰褐色極粗粒砂～中粒砂の薄層・葉層と2.5Y4.5/2暗灰黄色シルトの葉層の互層。所により、上部に2.5Y4/2暗灰黄色シルト質中粒～極細粒砂が乗り、下部に細粒の中疊以細の砂礫の薄層を挟む。
- 11層：7.5GY4/1(上部は10YR4.3/5褐色)暗緑灰色細粒の中疊以細の疊混じる(所により、薄層状・斑状)細粒～極細粒砂質泥。所により、中粒砂以細の砂を肩状・斑状に含む。
- 12層：2.5Y4.5/2暗灰黄色(酸化鉄分しみる部分では10YR4/3にぶい黄褐色)中粒の中疊以細の疊混じるシルト質極粗粒～極細粒砂+14層のプロック。酸化鉄(管状少・斑点状少・しみ状)・酸化マンガン(斑点状少)。
- 13層：7.5GY4/1暗緑灰色泥質砂。細分すれば、上位より、①7.5GY4/1暗緑灰色泥質細粒～極細粒砂、②5Y4/2灰オリーブ色極粗粒砂～極細粒砂、③7.5GY4.5/1暗緑灰色泥質中粒～極細粒砂、所々、④5Y6/3オリーブ黄色細粒以細の砂礫。
- 14層：2.5Y4/2暗灰黄色中粒の中疊以細の疊少量混じる細粒～極細粒砂質粘土質シルト。5Y4/2灰オリーブ色細粒砂～極細粒砂の斑を層状に含む。酸化鉄(管状少)。炭化物僅かに含む。
- 15層：2.5Y4/2暗灰黄色細粒～極細粒砂質粘土質シルト。
- 16層：2.5Y4.5/2暗灰黄色極細粒砂混じるシルト質粘土。間に5Y5/2灰オリーブ色シルト質細粒砂の葉層を挟む。酸化鉄(管状・しみ状)。
- 17層：5GY4/1暗オリーブ灰色泥質中粒～極細粒砂。所により、5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～極細粒砂・極粗粒砂以細の砂を斑状・葉層状に含む。炭化物少量含む。
- 18層：2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒～極細粒砂質泥。5Y5/2灰オリーブ色細粒以細の砂礫・粗粒砂以細の砂を斑状に含む。炭化物含む。
- 19層：7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～極細粒砂と2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質極細粒砂の薄層・葉層の互層。

- 20層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂質泥。下部は5G5/1緑灰色シルトの薄葉層との互層。
- 21層：7.5Y4/1灰色粘質土と2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土の互層。細分すれば、上部より、①2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂と7.5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層の互層、②2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂の薄層・葉層と7.5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト薄層・葉層と7.5Y4/1灰色極細粒砂混じるシルト質粘土の薄層・葉層の互層。
- 22層：10Y4/1灰色粘土の薄層・葉層と10Y4/1灰色シルト質極細粒砂の葉層の互層。炭化した植物遺体の葉層を挟み、最下部は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂の薄層。
- 23層：7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。下部は7.5GY4/1暗緑灰色細粒～極細粒砂混じる粘土質シルトを粒状に含む。
- 24層：7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。
- 25層：7.5GY4/1(24層より明るい)暗緑灰色粘土質シルト。
- 26層：7.5GY5.5/1緑灰色細粒砂～極細粒砂。下部は5GY3.5/1暗オリーブ灰色シルト質粘土の薄層・葉層との互層。
- 27層：5GY3.5/1暗オリーブ灰色シルト質粘土。所により、中位に分解の進んだ植物遺体の葉層を挟む。
- 28層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土の薄層と炭化した植物遺体の葉層の互層。最下部の薄層は2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト。所により、粒状・ブロック状に混じり合う。
- 29-1層：上位から、①2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥混じる極粗粒砂～極細粒砂、②5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じるシルト質粘土、③2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥混じる極粗粒砂～極細粒砂(所により、2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色泥質極細粒砂の葉層を挟む)、④7.5V4/1灰色粘土質シルト(植物遺体を含む)。西壁では②・④のみ。
- 29-2層：10GY6/1緑灰色極粗粒砂～極細粒砂。
- 30層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト。
- 31層：上位から、①5Y4/1灰色粘土の葉層、②7.5Y4/1灰色粘土+5Y4/1灰色粘土粒、③10Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト～シルト質粘土。
- 32層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質泥～泥質砂。
- 33層：2.5Y4/1黄灰色泥質極細粒砂の葉層と5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層・薄層の互層。
- 34層：10Y5/1灰色極粗粒砂～粗粒砂。所により、細粒の中疊以細の砂疊の薄層、5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂の葉層を間層的に挟む。
- 35層：7.5Y4/1灰色粘土質シルト～シルト質粘土。5Y4/2灰オリーブ色中粒砂～極細粒砂の薄層を間層的に挟む。下部には炭化した植物遺体・分解の進んだ植物遺体を含む。
- 36層：7.5Y5/1灰色粘質土。細分すれば、上位から、①7.5Y4/1灰色シルト質粘土、②2.5GY5/1オリーブ灰色粘土、③7.5Y4/1灰色シルト質粘土、④7.5Y5/1灰色シルト質粘土、⑤7.5GY3.5/1暗緑灰色シルト質粘土の薄層。植物遺体を含む。
- 37層：10Y4/1灰色極細粒砂～シルト混じる粘土。38・39層上位では細疊混じる。植物遺体を含む。
- 38層：5Y4/1灰色細粒の中疊以細の砂疊混じるシルト質粘土。炭化物少量混じる。所により、植

物遺体のレンズ状の葉層を挟む。

- 39層：10Y4/1灰色中粒の中疊以細の砂疊混じるシルト質粘土。38層より砂疊多い。所により、植物遺体のレンズ状の葉層を挟む。
- 40層：10Y3/1オリーブ黒色砂混じるシルト質粘土・41層・42層・45層・46層のブロック(径5cm前後まで)。39層との間に5Y4/2灰オリーブ色細疊以細の砂疊+10Y3/1オリーブ黒色砂混じるシルト質粘土のブロック(径4cmまで)を挟む。
- 41層：10Y3/1オリーブ黒色砂少量混じる粘土。42層の粘土が粒状に混じる。
- 42層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。2.5GY5/1オリーブ灰色粘土が粒状に混じる。一部に、炭酸鉄の団塊・粒が混じる。
- 43層：10Y3/1オリーブ黒色粘土。2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土が粒状に混じる。炭酸鉄の団塊・粒が混じる。
- 44層：5GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土。一部に、炭酸鉄の団塊・粒が混じる。
- 45層：10Y3/1オリーブ黒色砂混じる粘土質シルト～シルト質粘土。
- 46層：7.5GY4/1暗緑灰色泥質細粒砂～極細粒砂質泥。
- 47層：7.5GY5/1緑灰色泥質細粒～極細粒砂→中粒～細粒砂→粗粒砂 5Y4/1灰色細粒の中疊以細の砂疊・5Y5/1灰色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルトと2.5GY5/1オリーブ灰色中粒砂～極細粒砂の薄層の互層を間層的に挟む。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物

第1面(第4図、図版-1)

機械掘削により0層および2・3層を除去した面(T.P.+6.9m前後)で、近世に比定できる島畠1基(島畠101)・水田1筆(水田101)・井戸2基(S E101・S E102)・溝1条(S D101)を検出した。

島畠(島畠)

島畠101

1 調査区南端・2 調査区を除く1 調査区のほぼ全域で検出した。東西および北側は、調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分で東西幅10.6m・南北幅8.8mを測る。後で記載する水田201耕作土下面から検出面までの高差約0.2mを測る。島畠の盛土は、既存建物の工事に伴って殆ど破壊されており、1 調査区北東部の旧用水路の掘方部分に沿って残存していた。残存する島畠の盛土部分も機械掘削の対象部分であったため除去し、基底部分を検出した。島畠の盛土は、1 調査区西壁部分で砂質シルトを主体とする上下2層を確認した(層序の2・3層)。2・3層から土師器の破片・破碎面を持つ疊が出土しているが、島畠の構築時期を示し得るものはない。島畠101の構築時期は、後で記載する水田201との関係性から、近世に比定できる。

水田(水田)

水田101

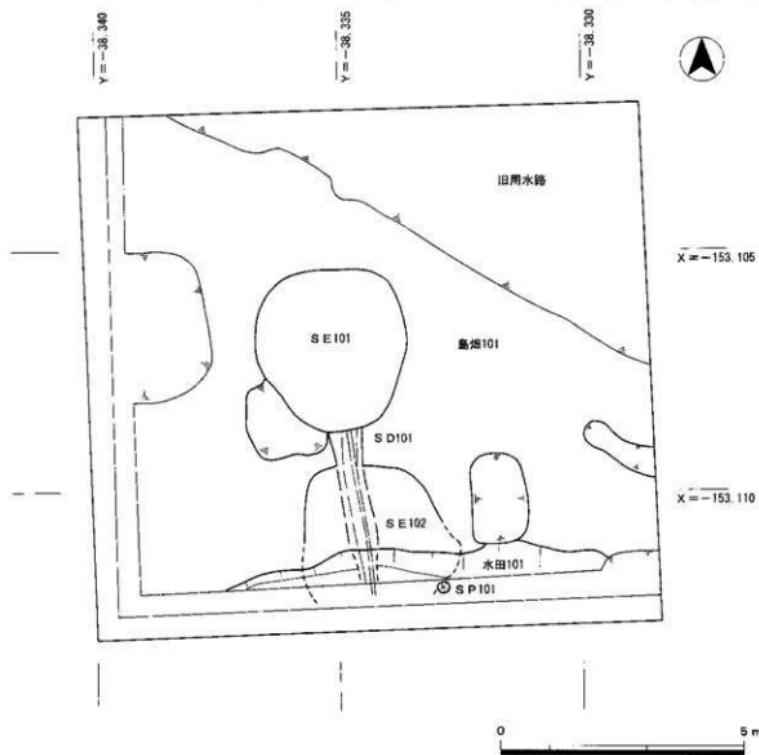
1 調査区の南端部、VI-7-2 G・H地区で検出した。2 調査区においては平面的に検出しな

かったが、壁断面において水田101耕作土に相当する水田耕作土を確認している。東西および南側は、調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分および壁断面での確認部分で、東西幅9.0m・南北幅6.7mを測る。水田101耕作土は、7.5GY3.5/1暗緑灰色中粒の中疊以細の礫混じる砂質シルトである。水田101耕作土からは、土師器・須恵器・肥前系磁器の破片が出土している。水田101の帰属時期は、出土遺物から島畠101構築以降の近世に比定できる。水田101耕作土は、後で記載する水田201耕作土の上層部分である。

井戸（S E）

S E 101

1 調査区のはば中央部のVI-7-1 G地区で検出した。平面形状は、南北に長軸を持つ不整円形を呈する。長径3.3m・短径3.1m、検出面からの深さ3.5m以上を測るが、底は調査掘削範囲外に至るため不明である。47層を取水層としたと考えられる。埋土は、掘方部分と井戸枠抜き取り



第4図 第1面検出遺構平面図(S=1/100)

部分に分けられ、掘方部分はベース層の大ぶりなブロックを主体とし、井戸枠抜き取り部分はベース層と島畠盛土・水田耕作土に由来する砂質シルト・砂質粘土質シルトの小ぶりなブロックを主体とする。桶を抜き取った痕跡が残り、竹製の簾が出土していることから、本来は桶枠を伴う井戸であったことがわかる。埋土からの出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・肥前系磁器・平瓦の破片が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物等から島畠101構築以降の近世に比定できる。S E 101は、後で記載するSD 101を伴う遺構である。

S E 102

1調査区南部のVI-7-1・2G地区で検出した。南側は水田101・水田201に上部が切られしており、平面形状は明確ではないが、不整円形ないし隅丸方形を呈するものと見られる。検出部分での東西長3.2m・南北長3.3m・深さ約2.5mを測る。34層を取水層とする。埋土は、逆台形を呈する断面形状に沿ってベース層に由来する砂質粘土質シルトの小ぶりなブロックを主体とする。埋土からの出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・肥前系磁器・平瓦・井戸枠瓦の破片が出土している。井戸枠瓦の破片は、埋土の下部で数枚分が出土しており、かつ、竹製の簾が出土していることから、瓦枠・桶枠を伴う井戸であったことがわかる。遺構の帰属時期は、南側が水田101・水田201に切られていることから、島畠101構築以前の近世に比定できる。

S E 102は、後で記載する水田201耕作土に切られることから、第1面で検出した他の遺構とは併存しない。島畠101・水田101・水田201・S E 101・SD 101を以って第1-1面検出遺構、S E 102を以って第1-2面検出遺構と捉えることができるが、本報告では敢えて検出した面に帰属させて報告する。

溝(S D)

S D 101

1調査区南部のVI-7-1・2G地区で検出した。南側は水田101に上部が切られ、北側はS E 101に切られる。検出長3.5m・最大幅0.65m・深さ0.39mを測る。断面V字形ないし逆台形。埋土は、ベース層および島畠盛土に由来する砂質シルトのブロックを主体とする。底部分に径6.0cm前後の粘質土の葉層の互層で充填された竹柵が埋設されており、S E 101の水を南側の水田に送る導水管として利用されたことがわかる。埋土からの出土遺物は、土師器・瓦器・備前焼の破片が出土している。遺構の構築時期は、S E 101に伴う遺構であることから、島畠101構築以降の近世に比定できる。

第2面(第5図、図版二)

4層上面(T.P.+6.9m前後)で、近世に比定できる水田1筆(水田201)、近世初頭以降に比定できる土坑1基(S K 201)、中世末から近世初頭に比定できる溝2条(S D 201・S D 202)を検出した。

水田(水田)

水田201

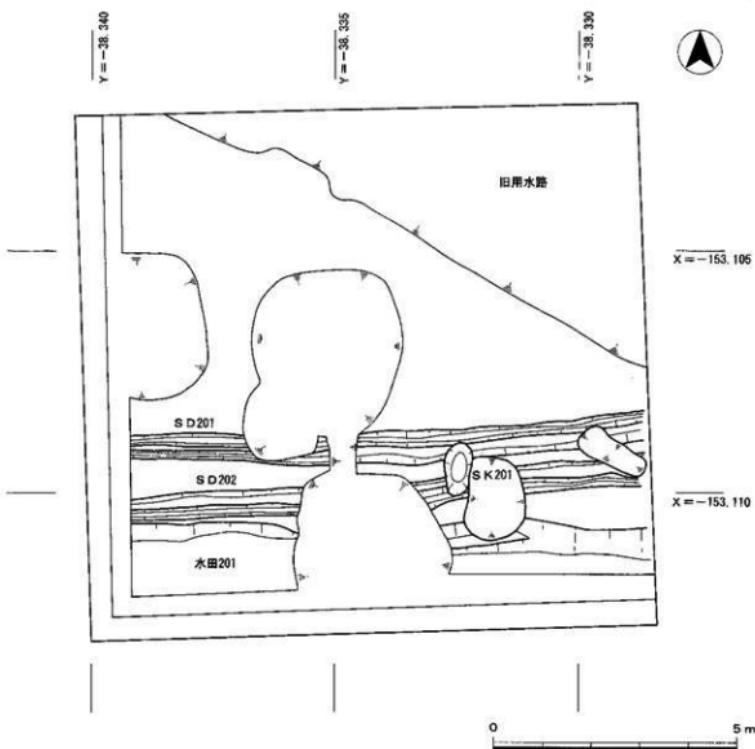
1調査区南部のVI-7-2G・H地区で検出した。2調査区においては平面的に検出しなかつたが、壁断面において相当する水田耕作土を確認している。東西および南側は調査区外に至るた

め、全容は不明である。検出部分および壁断面での確認部分で、東西幅10.7m・南北幅7.9mを測る。水田耕作土は、2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒の中疊に細の疊混じる砂質シルトで、土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器・屋瓦の破片が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物等から島畠101構築以降の近世に比定できる。水田201は、本来、第1面で検出すべき遺構で、水田201耕作土は、島畠101に伴う初期段階の水田耕作土であることがわかった。S E 101・S D 101は、S D 101の竹柵の高さから考えて、水田201に水を供給するためのものであったと考えられる。

土坑（SK）

SK 201

1調査区南部のVI-7-1・2G地区で検出した。東側の一部が既存建物建設時の搅乱によつて切られているが、平面形状は南北に主軸を持つ橢円形を呈すると見られる。検出部分での長径1.1m・短径0.6m・深さ0.15mを測る。埋土は、浅い楕形を呈する断面形に沿つて、上層の



第5図 第2面検出遺構平面図(S=1/100)

2.5Y5/3黄褐色細粒の中疊以細の礫混じる砂質シルト(S D 201・S D 202埋土より砂がち)、下層の2.5Y4/2暗灰黄色細粒の中疊以細の砂礫が堆積する。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・肥前系磁器の破片が出土している。遺構の帰属時期は、遺構の切り合いから、近世初頭以降と考えられる。

溝 (S D)

S D 201

1 調査区南部のVI-7-1 G・H地区で検出した。東西方向に伸びる。東西側が調査区外に至るため、全長は不明であるが、検出長10.7m・最大幅0.7m・深さ0.12mを測る。断面は、浅い半球形の小溝が並列あるいは部分的に重なるような形状を呈する。各小溝の底には耕起痕が見られる。埋土は、2.5Y4/1黄灰色中粒の中疊以細の礫混じる砂質シルトである。埋土からの出土遺物は、土師器・須恵器・黑色土器・瓦器の破片が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物・遺構の切り合い・遺構埋土による分類から中世末から近世初頭に比定できる。

S D 202

1 調査区南部のVI-7-1~2 G・H地区で検出した。S D 201と0.35~0.8mの間隔を隔て並列して伸びる。東西側が調査区外に至るため、全長は不明であるが、検出長10.7m・最大幅0.9m・深さ0.09mを測る。断面形状・埋土等の所見は、S D 201と同じである。埋土からの出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・瀬戸焼の破片が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物・遺構の切り合いから中世末から近世初頭に比定できる。

S D 201・S D 202は、並列する位置関係と底面に見られる耕起痕から、畝間溝と見られる。

第3面 (第6図、図版二)

7層上面(T.P.+6.7~6.9m)で、飛鳥時代前期以降に比定できる土坑1基(S K 301)、溝2条(S D 302・S D 303)、平安時代に比定できる溝2条(S D 301・S D 304)、中世に比定できる溝1条(S D 305)、小穴1個(S P 301)を検出した。

土坑 (S K)

S K 301

1 調査区西部のVI-7-1 G地区で検出した。西側が既存建物建設時の搅乱によって破壊されており、平面形状は不明である。検出部分での東西長0.7m・南北長1.1m・深さ0.1mを測る。断面形状は皿状を呈する。埋土は、2.5Y4/3オリーブ褐色細粒の中疊以細の礫混じる砂質シルト(粗粒)で、炭化物が混じる。出土遺物は、須恵器の破片が1点出土している。

小穴 (S P)

S P 301

1 調査区南東部のVI-7-2 G地区で検出した。S D 305を切る。平面円形で、径0.16m・深さ0.13mを測る。断面U字状を呈する。埋土は、2.5Y4/2暗灰黄色細粒の中疊以細の礫混じる砂質シルト(細粒)で、穴に沿ってベース層がグライ化している。出土遺物は、瓦器の細片が1点出土している。

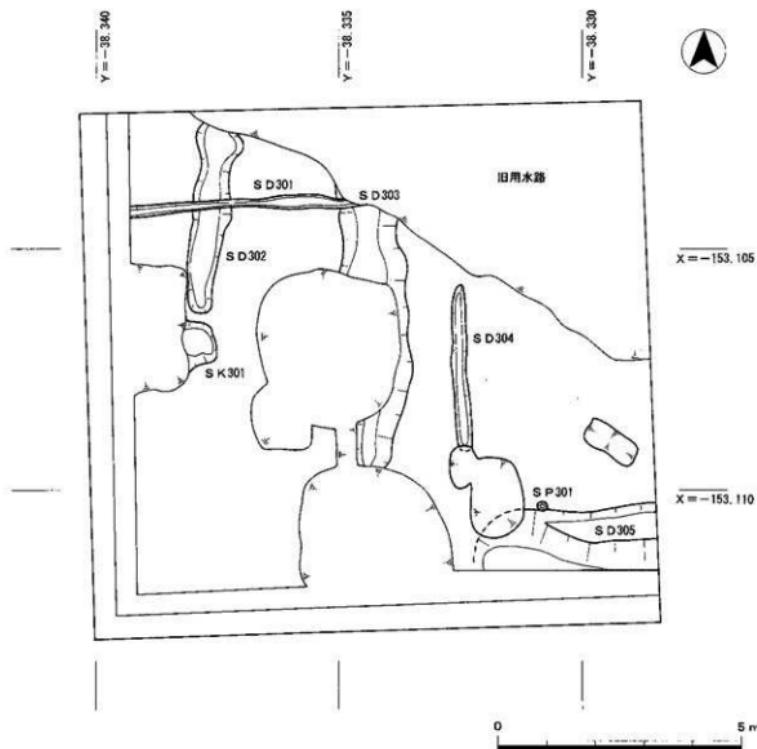
溝 (S D)

S D 301

1 調査区北西部のVI-7-1 G 地区で検出した。S D 302・S D 303を切る。東西方向に伸び、西側は調査地外、東側は旧用水路による擾乱によって破壊されているため全長は不明である。検出長4.8m・最大幅0.3m・深さ0.07mを測る。埋土は、2.5Y4/2暗灰黄色細粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト(層序の4層相当層)である。出土遺物は、土師器・須恵器・黒色土器の破片が出土している。

S D 302

1 調査区北西部のVI-7-1 G 地区で検出した。S D 301に切られる。ほぼ南北方向に伸び、北側は旧用水路による擾乱によって破壊されているため全長は不明であるが、平面形状から調査区外には伸びないと推測できる。検出長3.9m・最大幅1.0m・深さ0.16mを測る。埋土は、S K 301と同じである。遺物は出土していない。



第6図 第3面検出遺構平面図 (S=1/100)

S D 303

1 調査区中央部のVI-7-1 G 地区で検出した。ほぼ南北方向に伸び、南側は S E 102、北側は旧用水路による搅乱によって破壊されているため全長は不明である。検出長5.8m・最大幅1.9m・深さ0.3mを測る。埋土は、S K 301・S D 302と同じである。S D 301に切られる。出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土している。その中で、時期が比定できるものは、古墳時代後期末(6世紀末)から飛鳥時代前期(7世紀初頭)に比定できる。S D 303の帰属時期は、出土遺物から飛鳥時代前期以降に比定できる。

S D 304

1 調査区中央部東寄りのVI-7-1 G 地区で検出した。南北方向に伸び、全長3.4m・最大幅0.35m・深さ0.14mを測る。埋土は、S D 301と同じである。出土遺物は、土師器の細片が出土している。

S D 305

1 調査区南東部のVI-7-2 G・H 地区で検出した。東側・南側は調査区外に至り、西側は S D 203と搅乱に上場部分が切られるため、全容は不明である。検出部分での長さ3.8m・幅1.4m・深さ0.14m以上を測る。埋土は、ベース層・埋土の上位層のブロックを主体とする。S P 301に切られる。出土遺物は、土師器・須恵器・平瓦の破片が出土している。

各遺構の帰属時期は、出土遺物・層位・遺構埋土の分類から、S K 301・S D 302・S D 303が飛鳥時代前期以降に、S D 301・S D 304が平安時代に、S D 305・S P 301が中世に比定できる。

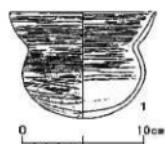
第4面(第7・8図、図版三)

22層までを除去した23層上面(T.P. +6.6~6.7m)で、古墳時代前期前半に比定できる堤1基(堤401)、河川1条(河川401)、土坑1基(S K 401)、小穴1個(S P 401)を検出した。

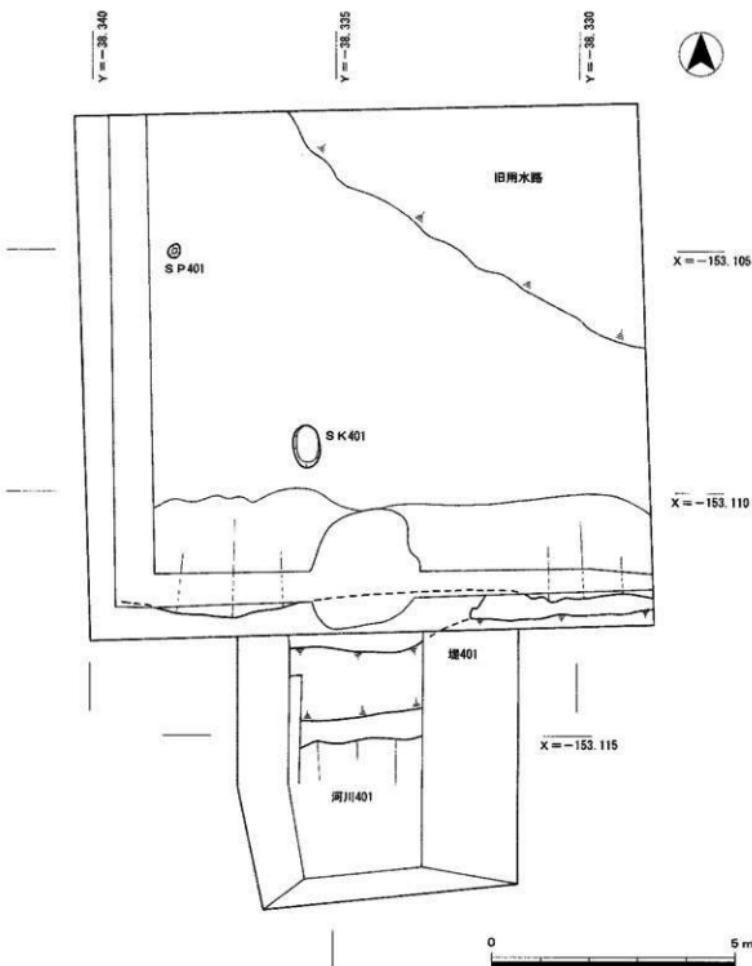
堤(堤)

堤401(第8図、図版三・七)

1 調査区南部・2 調査区北部のVI-7-2 G・H 地区で検出した。東側・西側は調査区外に至るため、全長は不明である。断面形は、河川側が切り立った台形を呈し、検出長11.4m・上面幅3.0mを測る。基底部の最大幅については、湧水のため南側の河川401に堆積した砂層を掘削することができず不明であるが、5.0m以上を測る。基底面からの高さは0.65mを測る。堤の盛土は、砂質シルトを主体とし、所々に挟む細粒砂～極細粒砂の葉層・薄層を境に上下2層と、最下層の3層に分けられる。盛土からの出土遺物は、弥生土器・土師器の破片が殆どであるが、盛土下層の下部から土師器の小形丸底壺(1)が、ほぼ完形で出土した。丸い体部から「く」の字に屈曲し、内湾して上外方に開く口縁部を持つ。体部最大径より口径が大きい。器面調整は、内外面ともに口縁部から体部上半にかけて横方向の細かいヘラ磨きを密に施す。原田昌則氏の分類(原田1993)による布留I期(古墳時代前期前半)に比定できる。堤の築堤時期は、出土遺物から古墳時代前期前半に比定できる。



第7図 堤401出土遺物
実測図



第8図 第4面検出造構平面図($S=1/100$)

河川（河川）

河川401

1調査区南部のVI-7-2G地区で検出した。北側を除き調査区外に至るため、全容は不明であるが、検出部分での長さ約2.8m・幅約3.8mを測る。深さについては、湧水のため河道に堆積した砂層を掘削することができず不明であるが、断面部分で0.4m以上を測ることを確認した。なお、1調査区南壁断面の中央や東寄りの部分で破堤の痕跡を確認した。10層上面で、この破堤部分から北方向へ帯状に伸びる砂礫を主体とする破堤堆積物を検出している。この破堤堆積物を伴う破堤は、河川401が最終的に埋没した時のものである。破堤堆積砂礫層から磨耗した弥生土器・土師器の破片が出土している。

土坑（土坑）

S K 401

1調査区南西部のVI-7-1G地区で検出した。平面形状は、西に振れる南北に長軸を持つ楕円形で、長径0.85m・短径0.55m・深さ0.1mを測る。断面形状は、不整な皿状で、その断面形状に沿って第4面を覆う22層が堆積している。遺物は出土していない。S K 401の帰属時期は、層位・埋土から古墳時代前期前半に比定できる。第5面で検出したS K 501と同じ位置にあり、S K 501の埋土上面の窪みを擬似的に検出したものである可能性がある。

小穴（S P）

S P 401

1調査区北西部のVI-7-1G地区で検出した。平面不整円形で、長径0.18m・短径0.15m・深さ0.12mを測る。断面形状は、半円形で、その断面形状に沿って第4面を覆う22層が堆積している。遺物は出土していない。S P 401の帰属時期は、層位・埋土から古墳時代前期前半に比定できる。

第5面（第9～12図、図版四）

24層までを除去した面(T.P.+6.5m前後)で、弥生時代後期後半に比定できる溝1条(S D504)、古墳時代初頭に比定できる土坑1基(S K 501)、溝4条(S D501～S D503・S D505)を検出した。第5面検出遺構の中には、断面上23層中あるいは上面に切り込み面を持つものも見られたが、平面での識別が困難であり、24層も希薄であったため、25層上面で遺構の検出を行った。

土坑（S K）

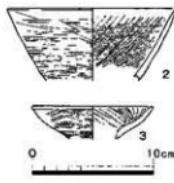
S K 501

1調査区南西部のVI-7-1G地区で検出した。平面形状は、西に振れる南北方向に長軸を持つ楕円形で、長径0.95m・短径0.7m・深さ約0.1mを測る。断面形状は、浅い半円形で、その断面形状に沿って第5面を覆う23層が堆積している。出土遺物は、弥生時代後期に比定できるものを含む土器片が出土している。S K 501の帰属時期は、遺構の切り合いと埋土から、古墳時代初頭に比定できる。

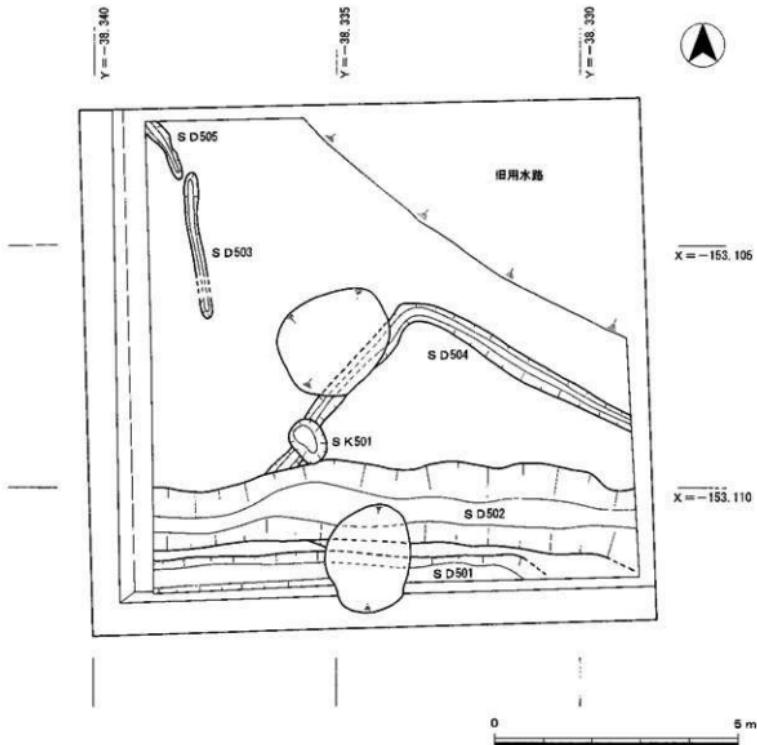
溝 (S D)

S D 501 (第9図、図版七)

1 調査区南端のVI-7-2 G・H地区で検出した。断面の観察から S D 502を切ることがわかる。東西方向に伸び、北側を除き調査区外に至るため全容は不明である。検出部分での長さ7.7m・幅0.7m・深さ0.27mを測る。埋土は、第3図の通りである。埋土からは、土師器の破片が少量出土している。そのうち2点(2・3)を図化した。2は直口壺。口縁～頸部のみ残存。上外方に直線的に伸びる口頸部を持つ精製品。器面調整は、口頸部内外面にヘラ磨き後、内面に放射状ヘラ磨きを施す。3は小形器台の受部。皿状の受部を持つ精製品。器面調整は、内面に横ナデ、外面にヘラ磨き後、内面に放射状のヘラ磨きを施す。2・3はともに、古墳時代初頭後半(原田氏分類、庄内III期)に比定できる。S D 501の帰属時期は、出土遺物から古墳時代初頭後半に比定できる。



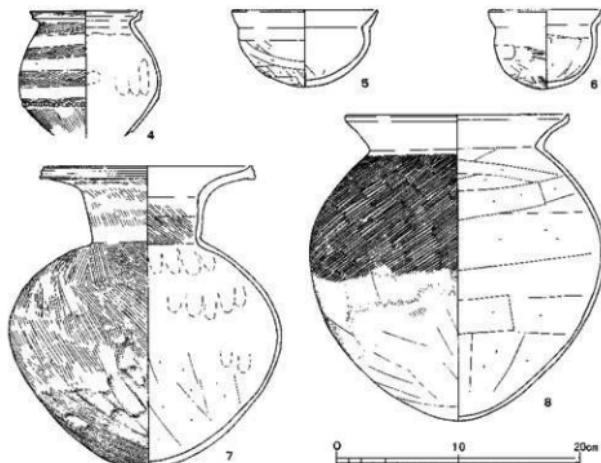
第9図 S D 501出土遺物
実測図



第10図 第5面検出遺構平面図(S=1/100)

S D502 (第11図、図版四・七)

1 調査区南端のVI-7-1~2 G・H地区で検出した。断面の観察から23層を切ることがわかる。東西方向に伸び、東側・西側は調査区外に至るため全長は不明である。検出長9.9m・最大幅1.8m・深さ0.4mを測る。埋土は、第3図の通りで、ブロック状の粘土質シルトを主体とする5層に分けられる。出土遺物は、古墳時代初頭後半に比定できる土師器が出土している。そのうち、1調査区南東部の埋土上層(第3図②層)部分から一括で出土した土師器4点(4・5・7・8)と、土師器鉢1点(6)を図化した。4は近江(湖東地域)系の壺である。受口状口縁部を持つ。口縁部外面には2cm前後の直線文を重なり合うように連続して施し、体部外面上半部には綾杉文を施す文様帶を3帯と、突帶上位に斜め方向の短い直線文を連続して施す。体部下半部に刻み目を施す貼付け突帶が巡り、突帶より下位には縱方向のハケナデを施す。色調は7.5YR8/6浅黄色を呈する。5は小形鉢。半球形の体部から斜上方に内湾気味に伸びる短い口縁部を持つ。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、底体部内面にナデ、底体部外面にヘラ削りを施す。外面は煤が付着し、鱗状に剥離している。6は小形鉢。半球形の体部から斜上方に内湾気味に伸びる短い口縁部を持つ。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、底体部内面に板状工具による縱方向のナデ、底体部外面にヘラ削りを施す。7は、東部四国系の広口壺。ほぼ完形で、口径17.0cm・器高24.8cm・体部最大径21.5cmを測る。体部最大径を中位よりやや上方に持つ偏球形の体部から上外方に直立気味に伸びる頸部、頸部から大きく外反し口縁部に至る。口縁端部は上方に拡張し、外傾する平坦面を持つ。口縁端面に2条の凹線が巡る。器面調整は、体部内面下半にヘラ削り、上半に指ナデ、体部外面・頸部内外面にハケナデ、口縁部に横ナデを施す。色調は7.5YR8/3浅黄色を呈する。8は庄内式壺。体部最大径を中位よりやや上方に持ち、尖り気味の丸底である。肩部から「く」の字に屈曲し、斜上方に外反気味に伸び口縁部に至る。口縁端部はつまみ上げられており、外側に平坦面をなす。器面調整は、体部内面にヘラ削り、体部外面上半に右上がりの細かいタタキ、体部下半部に縱方向のハケナデ、口縁部に横ナデを施す。古墳時代初頭後半(原田氏分類、庄内Ⅲ期)に比定できる。S D502の帰属時期は、出土遺物と造構の切り合いから、古墳時代初頭後半に比定できる。



第11図 S D502出土遺物実測図

S D 503

1 調査区北西部のVI-7-1 G 地区で検出した。ほぼ南北方向に伸び、全長3.0m・幅0.25m・深さ0.6mを測る。埋土は、浅い半円形の断面形状に沿って、23層が堆積している。出土遺物は、土器片1点が出土している。S D 503の帰属時期は、埋土から古墳時代初頭に比定できる。

S D 504 (第12図、図版八)

1 調査区南東部のVI-7-1 G・H、2 G 地区で検出した。南東-北西方向に「コ」の字形に巡る溝である。溝が巡る範囲は、検出部分で、長辺5.4m・短辺5.3mを測り、溝の深さは約0.2mを測る。断面は、外側に深い小溝、内側に浅い小溝が重なり合ったような形状を呈する。埋土は、10Y3/1オリーブ黒色細粒砂～極細粒砂混じる粘土質シルト・5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト・5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂のブロックが混じり合ったものである。平面形状・断面形状から竪穴住居である可能性を想定したが、溝の内側に柱穴・炉跡などが検出されなかったため、「コ」の字形に巡る溝とした。埋土から土器の破片と炭化木が出土している。9は弥生土器堀。口縁部～肩部。肩部から「く」の字に屈曲し、外上方に外反して開き口縁部をなす。口縁端部は僅かに外傾する平坦面を持つ。器面調整は、肩部内面に禾本科植物の稈による斜方向のナデ、肩部外面に右上がりのタキ、口縁部に横ナデを施す。弥生時代後期後半に比定できる。埋土から出土した土器の破片は、9と同一個体と見られるものを多く含む。S D 504の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期後半に比定できる。

S D 505

1 調査区北西部のVI-7-1 G 地区で検出した。南東-北西方向に伸び、北西側は調査区外に至るため全長は不明である。検出長1.35m・最大幅0.35m・深さ0.12mを測る。埋土は、浅い半円形の断面形状に沿って、23層が堆積している。遺物は出土していない。S D 505の帰属時期は、埋土から古墳時代初頭に比定できる。

25層上面には、23層・24層で充填された溝状の部分が検出された。断面形状が直で、平面も不明瞭なため遺構として扱わなかったが、S D 503・S D 505と共に、周辺調査地で検出されている耕作溝群と同様のものと考えられる。

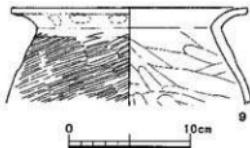
第6面 (第13・14図、図版五)

41層上面(T.P.+4.2~4.3m)で、弥生時代前期ないし中期に比定できる溝2条(S D 601・S D 602)を検出した。

溝 (S D)

S D 601 (図版五)

1 調査区西部のVI-7-1・2 G 地区で検出した。北側・南側は調査区外に至るため、全体の規模は不明であるが、南南東-北北西方向に伸び、検出長10.0m・最大幅2.4m・深さ0.4~0.5mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土については、第3図の通りで、ベース層のブロック



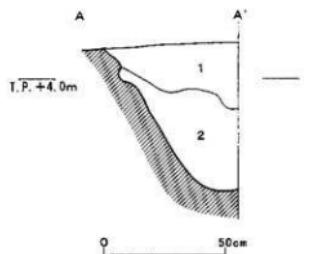
第12図 S D 504出土遺物
実測図

VI 久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65)

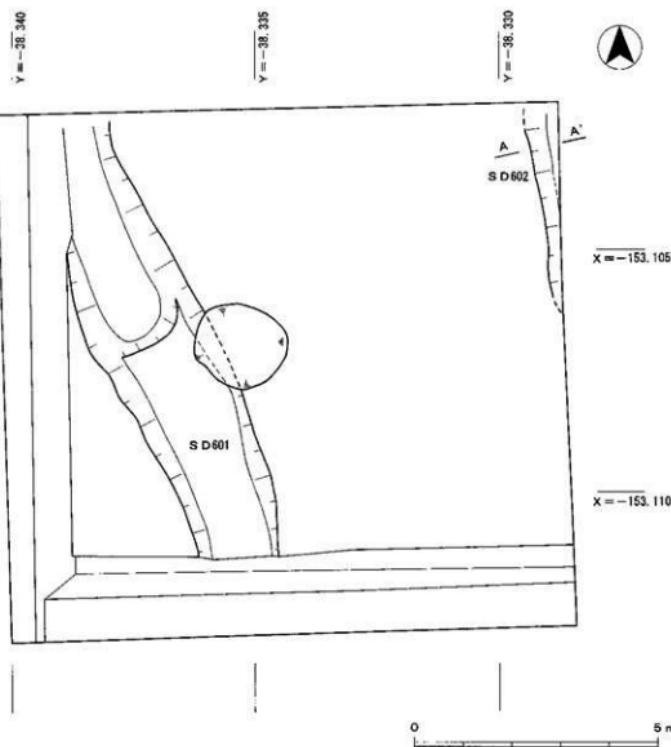
を主体とする2層に分けられる。遺物は出土していない。なお、41層上面にS D601を掘削し埋め戻した残土と見られる高まり(40層)を確認している。かつ、41層上面には乾痕が見られることから、41層上面が地表面であった時に、S D601が掘削・埋め戻しされたことがわかる。

S D602 (第13図)

1 調査区西部のVI-7-1H地区で検出した。西側を除き調査区外に至るため、全体の規模は不明であるが、東側南東北北西方向に伸び、検出部分での長さ4.3m・0.75m・深さ0.6mを測る。断面形状・埋土については、第13図の通りで、ベース層の



第13図 S D602断面図(S=1/20)



第14図 第6面検出遺構平面図(S=1/100)

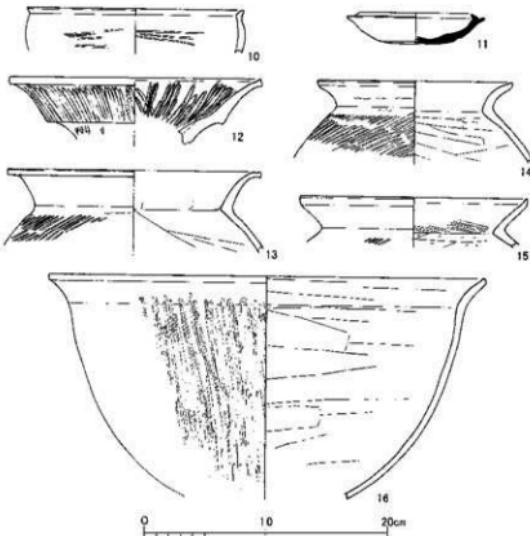
ブロックを主体とする2層に分けられる。遺物は出土していない。

S D 601・S D 602の帰属年代については、出土遺物がなく明確にできないが、層位から弥生時代前期ないし中期に比定できる。

2) 遺構に伴わない出土遺物（第15図、図版八）

4層出土遺物 4層からは古墳時代後期から平安時代にかけての土器が出土しており、そのうち2点(10・11)を図化した。10は黒色土器鉢。台付き鉢の口縁部と見られる。内湾する口縁部を持ち、端部は外上方に短く屈曲して内側に外傾する平坦面を作る。器面調整は内外面に横方向のヘラ磨きが残るが不明瞭である。平安時代前期(平安京II期、9世紀後半)に比定できる。11は須恵器杯身。半らに近い底部から斜上方に内湾気味に伸び受部に至る。受部は外上方に伸び、端部は丸い。立ち上がりは上内方に短く伸び、口縁部は丸い。器面調整は、底部内面にナデを施す。底部外面は回転ヘラ切り未調整。飛鳥時代前期(飛鳥II、7世紀中葉)に比定できる。

23・24層出土遺物 23・24層からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての土器が混在して出土しているが、時期を判別できないものが多い。そのうち5点(12~16)を図化した。12は二重口縁壺の口縁部。外反して短く開く頸部から斜め上方に外反する口縁部を持つ。口縁端部は外傾する平坦面を持つ。器面調整は、頸部内外面・口縁部内外面とともに横ナデ後、縦方向のヘラ磨きを施す。13・14はV様式ないしはV様式系と推定される甌。いずれも、口縁部～肩部のみ残存。13は肩部から上外方に直立気味に伸びる頸部、頸部から丸く屈折し短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は外側に平坦面を持つ。器面調整は、口縁部に横ナデ、肩部内面にナデ、肩部外面に右上がりのタタキを施す。14は肩部から「く」の字に屈曲し、外上方に外反して開き口縁部に至る。口縁端部は僅かに外傾する平坦気味の面を持つ。器面調整は、肩部内面にナデ、肩部外面に右上がりのタタキ、口縁部に横ナデを施す。15は庄内式甌。口縁部～肩部のみ残存。肩部から「く」の字に屈曲し斜め上方に直線的に伸びる口縁部を持つ。口縁端部はつまみ上げられており、外側に平坦面をなす。器面調整は、肩部内面にヘラ削り、肩部外面に右上がりの細かいタタキ、口縁部に横ナデを施す。口縁部内



第15図 遺構に伴わない出土遺物実測図

面に横方向のハケ目を残す。16は弥生土器鉢。台付鉢と推定される。口縁部～体部上半のみ残存。上外方に開く体部から斜め上方に外反して口縁部をなす。口縁端部は外側に平坦面を持つ。器面調整は、内面に横方向の板ナデ、口縁部外面に横ナデ、体部外面に縦方向のヘラ磨きを施す。12～16は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に比定できる。

1 調査区南東部の23層からは、2枚の板石が並んだ状態で出土している(写真1)。南側に長辺28.5cm・短辺8.5cm・厚さ3.0cmの板石、北側に長辺23.5cm・短辺22.0cm・厚さ2.9cmの板石を配している。石材は橄欖石安山岩と推定される。この板石は遺構に伴うものではなく、23層上面に置かれたものと考えられる。板石が置かれた時期は、層位から見て古墳時代初頭に比定できる。板石が置かれた目的については不明である。



写真1 1調査区 23層内板石出土状況(西から)

第3章まとめ

今回の調査では、南側の府センターによる竜華東西線、北東側の水処理施設に伴う調査の調査成果と関連するいくつかの調査成果を得ることができた。

第6面で検出した弥生時代前期ないし中期に比定できる2条の溝群(S D601・S D602)は、竜華東西線に伴う調査(第7区)で検出された4条の平行溝群と関連するものと見られる。これらの溝は、掘削後すぐに掘削した土で埋め戻されている点や、遺物を伴わないことにおいて共通している。同じ特徴を持つ弥生時代前期・中期の溝が、久宝寺遺跡の他、北龜井遺跡・跡部遺跡・山賀遺跡において検出されている。これらの溝の性格については、同様の所見を持つ溝の検出例の増加を待ち、明らかにして行く必要がある。

第5面では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定できる東西に伸びる2条の溝(S D501・S D502)を検出した。これらの溝については、水処理施設に伴う調査で当該時期の墳墓群が検出されており、これらの遺構群と有機的な関連を持つものであったと考えられる。S D502の埋土から一括で出土した土器は、近江(湖東地域)系・東部四国系・在地産の土器が混在し、また、水処理施設に伴い検出された墳墓の土器棺の中には東海地方の特徴を持つ土器が含まれており、当時の他の地域との交流を考える上で、貴重な資料となる。

第4面で検出した古墳時代前期前半(布留式古相)の堤(堤401)と河川(河川401)は、竜華東西線に伴う調査(第7区)で検出された古墳時代前期前半(布留式古相)に築堤された堤とその北側の河川の右岸に当たるもので、当調査地付近での河川の幅は、およそ10.5mに復元できる。

第3面から第1面で検出した遺構群は、飛鳥時代前期以降の主に農耕に伴うものである。1調査区南端以南の第1・2面で検出した近世以降の水田以外は、畑作に伴うもので、当調査地が主に畠地として利用されていたことが窺える。

第3面で検出した平安時代の溝（SD301・SD304）は南北・東西方向に、第2面で検出した中世末から近世初頭の畠間溝（SD201・SD202）は東西方向に伸びている。竜華東西線に伴う調査（第7区）では、条里地割に規制された10世紀以前の東西方向に伸びる大畦畔が検出されている。このことから、当調査地周辺では、遅くとも平安時代には、条里地割に規制された土地利用がなされていたことがわかる。以後、現代に至り工場に伴う建物が建設されるまで、連続と耕作地として利用されてきたことが窺える。

註記

- 註1 府センターによる竜華東西線に伴う調査区のうち7区が、今回の調査地の南側に隣接しており、水処理施設に伴う調査区が、北東側に隣接している。各調査区の調査成果については、下記文献による。
・西村 歩・奥村茂輝・辻本裕也 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査—』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第118集
・金光正裕・亀井聰・菊井佳弥編 2005『久宝寺遺跡 発掘調査成果—2001～2004年度のまとめ—』（財）大阪府文化財センター
- 註2 弥生時代前期・中期の溝について
・赤木克視・竹原伸次・大楽康宏 1985『亀井北（その3） 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・田中利弘・豊本道昭 1986『山賀（その5・6）一河内平野における初期農耕遺跡の調査—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・成海佳子 1997『II跡部遺跡第11次調査（A T93-11）』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』（財）八尾市文化財調査研究会
・註1 前掲文献

参考文献

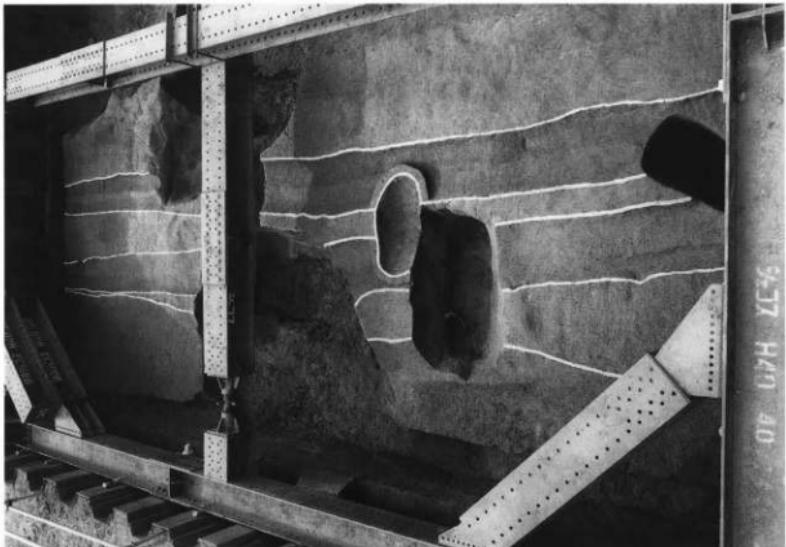
- 周辺調査区における既往調査の成果について
・註1 文獻
・成海佳子 1992「13. 久宝寺遺跡第9次調査（KH91-9）」「平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1993「II久宝寺遺跡第1次調査（KH84-1）」「財団法人八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会
・酒 斎 2001「5. 久宝寺遺跡第34次調査（KH2000-34）」「平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・金親満夫・酒 斎・水谷謙彦 2004「III久宝寺遺跡第37次調査（KH2001-34）」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告77」（財）八尾市文化財調査研究会
・久宝寺遺跡第23次調査（KH97-23）、第30次調査（KH99-30）については、本書掲載
- 層序の記載に関する用語・区分について
・堆積学研究会 1998『堆積学辞典』朝倉書店
・William J. Fritz & Johnnie N. Moore著、原田一憲訳 1999『層序学と堆積学の基礎』（株）愛智出版
- 土器の形式・編年で参考とした文献
・田辺昭三 1966『陶古色窯址群』平安学園考古学クラブ
・1992「古代の上器1」「都城の土器集成」古代の土器研究会編
・1993「古代の土器2」「都城の土器集成II」古代の上器研究会編
・原田昌則 1993「II久宝寺遺跡第1次調査（KH84-1）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 2003「第5章遺構・遺物の検討 第1節中・南河内地域における弥生時代後半～古墳時代初頭前半（庄内式古朴）の土器の細分試案について」「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う—」（財）八尾市文化財調査研究会報告74（財）八尾市文化財調査研究会



調査地全景(東から)



1調査区 第1面全景(北から)



1調査区 第2面全景(東から)



1調査区 第3面全景(北から)



1 調査区 第4面全景(北から)



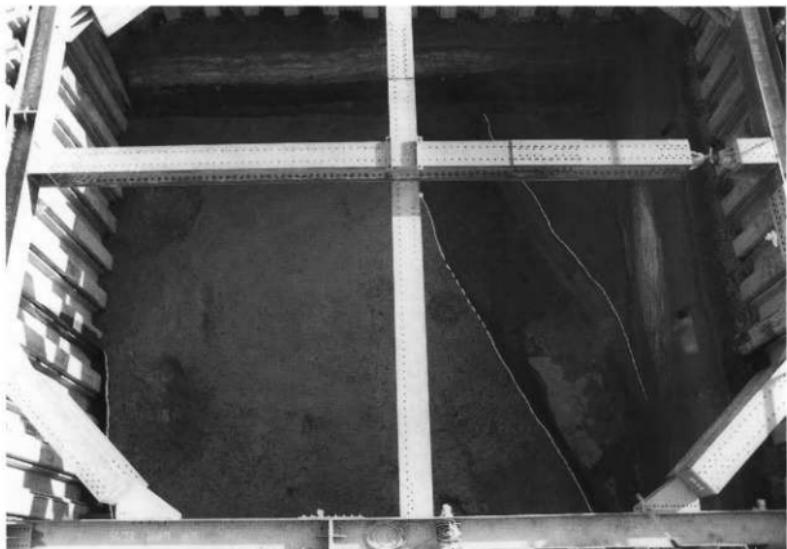
1 調査区 堤401(北東から)



1 調査区 第5面全景(北から)



1 調査区 SD 502土器出土状況(北から)



1 調査区 第6面全景(北から)



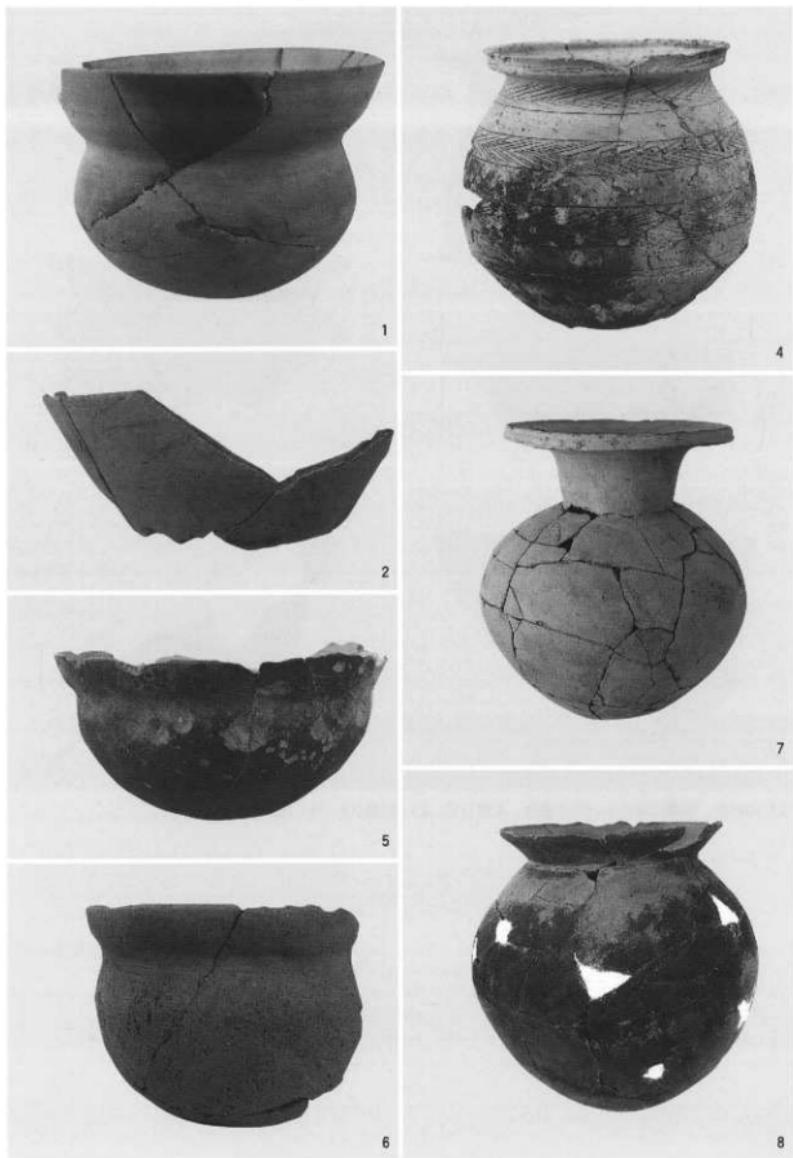
1 調査区 S D601断面(北から)



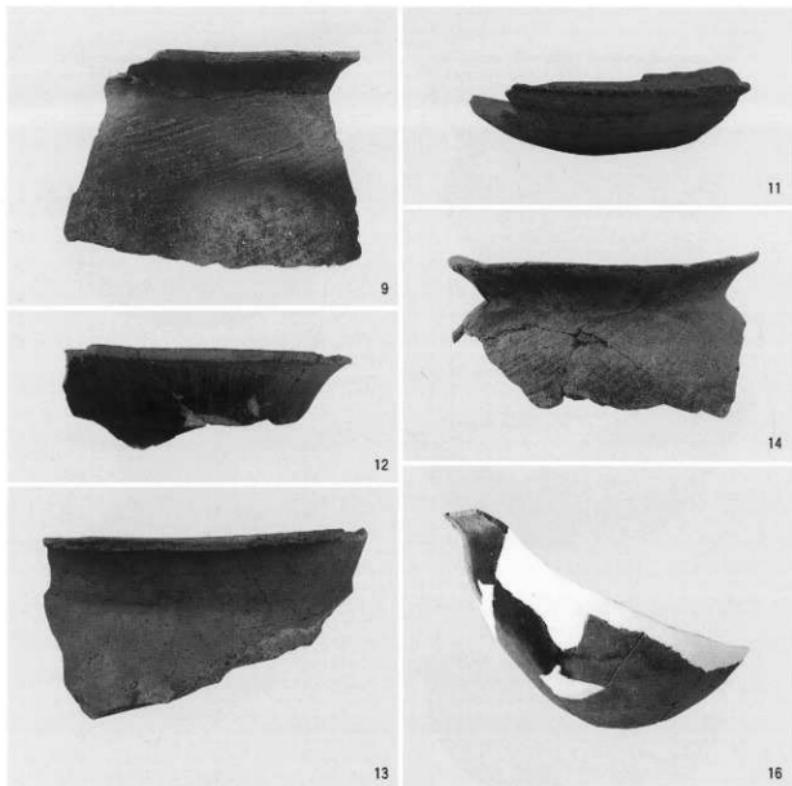
2調査区 第4面全景(東から)



調査作業風景(北から)



提401(1)、SD501(2)、SD502(4~8)出土遺物



S D 504(9)、遺構に伴わない出土遺物 4層(11)、23・24層(12~14・16)

報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうきけんきゅうかいほうこく89
副書名	I 久宝寺遺跡(第23次調査) II 久宝寺遺跡(第30次調査) III 久宝寺遺跡(第39-51次調査) IV 久宝寺遺跡(第50次調査) V 久宝寺遺跡(第63次調査) VI 久宝寺遺跡(第65次調査)
卷次	
シリーズ名	財團法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	89
編著者名	I 原田昌則・二宮満夫 II 原田昌則・荒川和哉 III・IV 原田昌則 V・VI 荒川和哉
編集機関	財團法人八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2 電話 0729-94-4700
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	北緯	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第23次調査)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 1・2丁目地内	27212	23	135度 25分 13秒	34度 37分 07秒	19971023 ~ 19980630	7720.16	道路建設に伴う
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第30次調査)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 1・2丁目地内	27212	23	135度 35分 19秒	34度 37分 02秒	20000120 ~ 20000317	893.0	道路建設に伴う
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第39-51次調)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 2丁目地内	27212	23	135度 35分 13秒	34度 37分 06秒	20020219 ~ 20020920	744.91	道路建設に伴う
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第50次調査)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 1丁目地内	27212	23	135度 35分 25秒	34度 37分 07秒	20030603 ~ 20030605	12m ²	道路建設に伴う
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第63次調査)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 1丁目地内	27212	23	135度 35分 25秒	34度 37分 07秒	20050510 ~ 20050708	93.6m ²	防火水槽建設に伴う
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第65次調査)	おおさかみやおしりゅうけいとう 大阪府八尾市龍華町 2丁目地内	27212	23	135度 35分 30秒	34度 36分 60秒	20050727 ~ 20051027	154.5m ²	防雷器設置工事に伴う

所収遺跡名	種別 集落	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
			弥生時代前期	土坑・小穴・溝、 自然河川			
久宝寺遺跡 (第23次調査)			弥生時代中期	包含層	弥生土器・石器		
			弥生時代後期	土坑・溝・落ち込み・ 小穴・足跡等・自然河川	弥生土器・木製品・ 石器		
			古墳時代初期	土坑・溝	土師器・木製品		
			古墳時代後期	土坑・溝	土師器・須恵器・ 木製品・石製品		
			飛鳥時代	砂脈		奈良時代以前の 地震痕跡	
			奈良時代～平安時代	掘立柱建物・井戸・ 土坑・溝・小穴・ 自然河川	十輪器・須恵器・ 綠釉陶器・黒色土器・ 墨書き陶土器・屋瓦		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第23次調査)	生産域	弥生時代後期	小溝		
		近世～近代	井戸・溝・小穴・鳥畠・道路状遺構・橋	土師器・須恵器・同産陶磁器	
	墓域	古墳時代初頭～前期	墳墓・土器棺墓	土師器・組合式木棺	6基の墳墓を検出
久宝寺遺跡 (第30次調査)	集落	古墳時代中期～後期	土坑・溝	土師器・須恵器・石製品	
		平安時代前期～後期	土坑・溝	土師器・瓦器・屋瓦	
	生産域	近世	井戸・土坑・溝・小穴・水田・畦畔・鳥畠	土師器・須恵器・屋瓦	
久宝寺遺跡 (第39-51次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代初頭	土坑・堤状遺構・溝		
		古墳時代初頭～前期	溝・自然河川	土師器・鉄製品	溝内から鉄剣が出土
		古墳時代中期	土坑・溝・堰・護岸施設・自然河川	土師器	
		飛鳥時代	溝	土師器・須恵器	
		平安時代後期～近代	井戸・土坑・溝・落ち込み	土師器・須恵器	
久宝寺遺跡 (第50次調査)	集落	奈良時代	土坑・溝	土師器・須恵器	
久宝寺遺跡 (第63次調査)	集落	弥生時代前期後半	土坑・溝	弥生土器	
		弥生時代後期前半	堅穴住居・土坑	弥生土器	堅穴住居内の跡の炭化物の放射性炭素年代測定の実施
		古墳時代後期	流路	須恵器	
		奈良時代前期～平安時代前期	流路	土師器・須恵器・屋瓦	「都口」と記された墨書き器出土
	生産域	古墳時代前期	溝		
		近世	井戸・水田		
久宝寺遺跡 (第65次調査)	集落	古墳時代初頭～前期	土坑・小穴・溝・河川・堤	古式土師器	
		弥生時代前期～中期	溝		
		弥生時代後期後半	溝	弥生土器	
		飛鳥時代前期以降	溝・土坑	土師器・須恵器	
		平安時代	土坑・溝	須恵器・黒色土器・瓦器	
	近世	鳥畠・水田・井戸・溝	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・同産陶磁器		

財團法人八尾市文化財調査研究会報告89

久宝寺遺跡

- I 久宝寺遺跡第23次調査
- II 久宝寺遺跡第30次調査
- III 久宝寺遺跡第39・51次調査
- IV 久宝寺遺跡第50次調査
- V 久宝寺遺跡第63次調査
- VI 久宝寺遺跡第65次調査

発行 平成18年3月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX 0729(94)-4700

印刷 (株)近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号

TEL0729(72)5918

表紙 レザック66<260kg>

本文 ニューエイジ<70kg>

図版 マットアート<110kg>

